筍の悦虐（ショタマゾ）

ロリマゾ番外編
（蕾の悦虐）

性少年包弄記
悦辱編

濠門長恭

目次

１．サポーター..... - 2 -
２．ブルマ..... - 11 -
３．８の字バンド..... - 36 -
４．V字ふんどし..... - 43 -
５．コックリング - 62 -
６．ミニスカート - 114 -
７．ホットパンツ - 132 -
８．三角ビキニ - 143 -
９．ブリーフ - 163 -
10. パンスト - 168 -
後書き - 172 -

注記：
本文は（ほぼ）常用漢字のみで表記しているので、不自然な当て字も使っています。

１．サポーター

「ああ。なんという透き通るような肌だ」
「きみのたくましい筋肉こそ、素晴らしいよ」
　ブリーフ一枚の裸になって、わざわざ教壇の上で抱き合うふたり。ホモってわけじゃない。山下クンのことを、誰かが連載中の少女漫画（最近は、男子のあいだで少女漫画が人気になっている）の主人公に似ているとか言い出して、それなら小見田クンは相手役に似ているということで、当人たちが悪ノリしてるってわけ。
　うちの学校は頭髪が自由だから、ふたりの悪ノリも（なんとか）絵になってる。坊主頭じゃ、絶対に１９世紀末の寄宿制学院にならないものね。
「もう、やめろや」
「新ネタはないのかよ」
　なんて言いながらも、みんなの視線は『風と木ゴッコ』のふたりに集中する。
　でも、不思議だな。女子は、あんまり少女漫画を話題にしない。今のところは、今月から始まったテレビドラマの『おしん』で盛り上がってる。
　僕は、どっちもそんなに好きじゃない。少女漫画で描かれる同性愛は美化され過ぎててウソっぽい。少女漫画の主人公と現実のふたりとじゃ、年は近くても、まるきり違う。まわりがはやし立てるほど似てなんかいない。それに、漫画は表現もソフト過ぎると思う。叔父とのベッドシーンだって……なんて考えている場合じゃない。みんなの視線が教壇の二人に集まっているうちに。
　僕はズボンだけ脱いで、素早く体操パンツにはき替えた。なんてコソコソしたのは、下

着を見られたらかなりヤバイから。

『ケツ割れ』という水泳用のサポーターがある。前はふくらんだ逆三角形で、下の頂点から平たい編みゴムが二本、お尻の下を巻く形で腰の帯につながってるやつ。その二本の編みゴムを腰のところで切り離して重ねて、お尻の割れ目を通る位置に縫い付けているのが、今現在の僕が着けている下着（かな？）。編みゴムの途中に大きな結び目があるのは、二本がバラケない工夫と長さの調節のため。お尻の穴に当たっているのは、まったくの偶然。と、言い訳できなくもないけど。三角形の布の裏側全体にマジックテープ（の、イガイガしているほう）を貼り付けてあるのは――サポーターのふくらみが大きすぎるので、ペニスと玉を固定する工夫。というのは、かなり苦しいね。

これを着用してると、布のふくらみがすごく窮屈になるし、なぜか（白々しい）マジックテープがぬるぬるになってくる。ランニングとかすると、暴発寸前。それを体育の授業中も着けているなんて、先週に１時限だけ冒険した裸学ラン（トイレの個室で着替えた）よりも無茶だと、自分でも思う。順番待ちをしてる時間が長いマット運動だから、思い切ったんだけどね。

授業は無事に乗り切った。全員でマットを元の場所に戻して、解散。だったけど。

「いかん。補助マットは倉庫に片付けるんだった」

だよね。そこから出したんだから。

「畑山、手伝ってくれ」

戸坂先生から、不意打ちのご指名。名前は知臣だけど、「トモオミ先生」なんて気安く呼ぶ生徒はいない。僕だって、薫（かおる）クンとは呼ばれない。オトナに近づいたようなくすぐったい気がしていたのも去年まで。は、ともかく。このご指名は出席番号順でもなんでもない、戸坂先生の気まぐれ。一度当てられると、全員が終わるまで二度目はないから公平なんだけど、なにも今日でなくてもなあ。

体育館の隅に積み上げたマットから半マットだけを取り出して、倉庫へ運ぶ。のは、す

ぐに終わったんだけど。教室に戻ろうとする僕の行く手に先生が立ちふさがって、とんでもないことを言った。

「体操パンツを脱いでみろ」

瞬間（バレた！）と思った。体操パンツって、けっこうピチピチ。授業中に今さらながらに気づいたんだけど、ブリーフの線がかすかに浮かび上がる。ブルマのはみパンを熱心に観察するやつはいても、男子生徒のお尻を注視するやつなんていないだろうと思ってた。もしも僕のパンツにブリーフの線が出ていないと分かっても、それがノーパン疑惑に直結するわけでもないだろうし、ケツ出しサポーターまで思いつくはずもないと自分を安心させてたんだけど。

固まっていると、さらにとんでもない言葉。

「自分で脱げないのなら、先生が脱がしてやるぞ」

これって、教師の台詞じゃない。でも……まさかまさかまさか。なんて空回りしてたら、ほんとうに先生が手を伸ばしてきた。

「あ……」

ちいさく叫んだときには、体操パンツをずり下げられていた。だけでなく、体操シャツの裾までめくられていた。シャツを首にかけられた。正確にいうと――前をめくられて襟を抜かれて、それを首の後ろに掛けられた。胸まで露出したのは、どうでもいいけど（よくない）、変態チックに改造したサポーターが丸見え。

「変わったパンツをはいているな。どういうつもりだ？」

と、言われても。自分でチンチンを虐めるのが好きだからなんて、絶対に言えない。

「ブリーフだと体育のとき、位置がずれて気持ち悪いので……」

用意しておいた言い訳をシドロモドロ。

「ウソをつけ」

今度はサポーターまでずり下げられた。裏に貼ってあるマジックテープも見られた。

「このザラザラでチンポを固定するとでもいうつもりか？　それなら、この先走り汁はど

ういうわけだ」

「あっ……」

今度の声は、かなりうろたえてた。すっかり縮みあがってるのに、皮をむかれて、こねくられて、先生の指についたネバネバを唇になすりつけられた。

チンチン以外は完全に固まってる僕――なんて、ふざけてる場合じゃない。

先生が、すっと身を離した。

「詳しく話を聞く必要があるな。だが、指導室に呼び出すのもかわいそうだ。先生の下宿へ来い」

学校から２Ｋｍほど離れた公園で待っているように言われて、その場は解放された。

詳しく話を聞くって、どういう意味なんだろうか。指導室じゃないのは、ほんとうに僕のことを思ってくれてなんだろうか。先生にも都合が悪いんじゃないかな。いくら男子だからって、いきなり下着を脱がすなんて、やっぱり変だ。そんなことを考えながら教室に戻った。

もう、女子も更衣室から戻ってた。ので、体操服の上に学ランを着た。カッターシャツと肌着はカバンに。クラブ活動は読書クラブで、しかも幽霊部員だから、すぐに下校。通学路からはずれた道をたどって、公園へ行った。野球をする広さもない公園。遊具から離れたベンチにぽつんと座って。また、同じことを繰り返し考えてしまう。

戸坂先生は三十分ほどで来た。うちの学校はバスケ部だけがすこし強いけど、外部コーチが仕切っているから、顧問をしている体育教師の出番はない。ので、こんなに早い。

先生の後に続いて公園を出て５分ほど歩いて着いたのは、小さなアパート。間取りも狭い。二人並ぶと窮屈な玄関の右がキッチンで、左のドアはバス・トイレだろう。突き当りのドアを開けると、フローリングの部屋。ベッドと机と整理ダンス（の上にテレビ）とファンシーケースとで、狭い部屋がさらに狭くなってる。

「ちょっと待ってろ」

僕をドアの近くに立たせといて。先生は、いきなり服を脱ぎ始めた。て、下着まで。と

うとうブリーフまで脱いですっぽんぽん。勃起したときの僕よりも大きなペニス（チンチンなんて可愛いもんじゃない）が、でろんと垂れ下がって……なくて、縮れ毛のジャングルから斜め下に突き出ている。半勃起状態。

先生が整理ダンスから白い布を取り出した。折りたたんであるのを伸ばすと、幅が３０ｃｍくらいで、長さは２m以上かな。その端を肩にかけて前へ垂らして、股間を包んだ。後ろに引き上げてねじりながら腰を巻いて、余った部分は腰に巻き込んだ。肩にかけていた布で二重に股間を包んで、同じように後ろへ引き上げて、さっきとは反対側に巻き込んで。

フンドシだと、やっと気づいた。そうか、こういうふうに結ぶんだ。感心してしまった。というのも――サポーターを改造したのも、フンドシが格好良く（というよりもHぽく）思えたからなんだ。

「ふむ。六尺フンドシがいちばんピシッとするな」

かどうかは、僕には分からないけれど。先生にはよく似合ってると思う。四角い顔にスポーツ刈り。腹筋も割れてて、引き締まった肉体。日本男児ここにあり。みたいな。

その日本男児が、僕に向き直った。

「おまえのフンドシもどきも見せてみろ」

ドキン。形が似てるからそう言ったんだろうけど、心の中を見透かされた気分になった。

「あ、はい……」

まだ手に持っていたカバンを床に置いて。最初に学ランを脱いだ。それから、体操シャツ。先生がフンドシだけなんだから、僕も同じにしなくちゃ。ベッドとか勝手に使っちゃいけないと考えて、脱いだ服は床に置いた。ズボンを脱ぐと、急に心細くなった。サポーターの締めつけが、生々しく感じられた。心臓がバクバクしてる。

裸で突っ立っている僕の後ろに先生が回り込んだ。がしっと腕を巻きつけられた。先生の右手が、僕の股間をつかんだ。

「……」

恐怖は、すこしあった。不安は大きい。期待は――まさかという思いが打ち消している。

「こんな下着をつけて、授業中もHなことを考えているんだろう」

先生の右手が、僕の股間をムニュムニュともむ。

「それも、女の子とセックスをしてみたいとかいった、健全な妄想ではなさそうだな」

ドキン、なんてものじゃない。ずばりと言い当てられて、頭が真っ白になった。

「どんな妄想をしているんだ？　正直に言ってみろ」

言えるわけ、ないよ。

僕が黙っていると、先生は胸に巻いた腕の力を緩めて――右の乳首をつまんだ。つまんだり、軽くつねったり、くすぐったり。しながら、右手はずっと股間をもんでいる。

腕は自由になったけど、先生の手を払いのけられない。しかられるんじゃないかというおびえと、もっといじられていたいという気持ちと。

ちっともHな気分じゃないのに、刺激でサポーターがきつくなってくる。マジックテープのギザギザが、チンチンに突き刺さって――痛いんだけど、ますます勃起する。

それが１０分ほど（じゃなくて、せいぜい１～２分だろうけど）続いて。

不意に先生が身を引いた。

「言いたくないのなら、無理強いはしない。もういいから、帰れ」

え……？！

先生は、ベッドに投げ出してあったトレーナーを手に取った。

空白だった頭に、いろんな考えが渦巻き始めた。

学校の先生と生徒だものね。男同士だから不純異性交遊にはならないけど、もっとスキャンダルだよね。先生は釣り針を垂らしたんだ。僕が食いつかなければ、そこでおしまい。そして、たぶん……今日と同じ明日が訪れる。だけど。もし食いついたら……どうなるんだろう。

「僕……強い人にHな虐め方をされたいんです」

うわあ。言っちゃった。

「だけど、女の人に虐められるのって悔しいから……」

強い男性に、となっちゃう。それでも手足が自由だったら、名誉のためにも抵抗しなくちゃいけないから、縛られたりハリツケにされたりするのがいい。

そんな場面を想像しながら、独り遊びをすることもある。洗濯ロープで足をぐるぐる巻きにして、物差しで自分をたたいたり。８の字にしたロープに背中で両手を突っ込んで、床に寝転がって、勃起したチンチンを無理に下向きに押しつけてみたり。画ビョウを並べた椅子に（想像の中のオトナに無理強いされて）座ったり。

気がついたら、これまでにしてきた独り遊びのすべてを告白していた。

先生が黙って、奇妙な表情で僕を見つめてる。そして、ため息をついた。

「どうにも救いようのない変態だな」

ヤバ……あきれられた。

「毛も生えていないうちから、そんなことを考えて、いや、しているのか。ホモでマゾで、それを妄想どころか実践しているとはな」

先生は部屋の隅に立てかけてあった竹刀を手に取った。

バシン。床をたたいた。

ビクッとすくんでしまった。

「おまえのような変態は、野放しにしておくと何をしでかすか分からん」

先生が僕の後ろに回り込んで。

バシン！

いきなりお尻をたたいた。

「痛いッ……」

「動くな！」

ドスの利いた声でしかられて、お尻にまわそうとしていた手が止まる。

「これからは、俺がおまえの変態根性を徹底的に鍛えてやる」

正面に戻ってきて、竹刀の先でサポーターのふくらみをぐりぐりとえぐった。

変態根性をたたき直すとかじゃなくて……鍛える？

それって、つまり……駄目だ。チクチクの刺激が強くなって、暴発しそう。

たまらずに腰を引いたけど、今度はしかられなかった。竹刀が引き戻される。

「そのジョックストラップも脱いで、素っ裸になれ」

初めて聞く単語だけど、意味は分かる。そうか、こういう形のサポーターはジョックストラップていうのか。フンドシにも、六尺とか越中とか相撲のマワシがあるのと一緒……かな？

「さっそく今日からでも鍛えてやりたいところだが……」

先生が整理ダンスの隅から小さなリングを取り出した。それから、思い出したように尋ねる。

「おまえ、精通はあったんだろうな」

よっぽど子供に見られてる。もう２年生だよ。そりゃ、先生の年令に比べたら半分未満だけど。

「はい……」

大威張りで答えたいところだけど、チンチンまで見られてるのに、なぜか恥ずかしくて、蚊の鳴くような声になっちゃう。

「いつのことだ。夢精だったのか、オナニーだったのか？」

ううう。夢精する暇もないくらいオナニーしてます。なんてことまでは言わなかったけど。精通は二か月前で。両足を縛って太ももにチンチンをはさんで、両手は８の字ロープで後ろ手縛り（でも、自分で抜けるからつまらない）にして、ぐううっと反り返ったときの刺激で――というのは、白状してしまった。

ふう。と、先生がため息。また、あきれられた。でも、今度は――先生が、うれしい方向にあきれてるって、なんとなく分かった。

「いつまでもみすぼらしい粗チンをおっ勃ててるんじゃない」

不意打ちで、ピチッと玉を弾かれて。

「あう……」

ずうんと重たい痛みが腰を突き抜けて。両手で股間を押さえてうずくまり――かけたところを、肩をつかんで引き起こされた。両手が払いのけられる。

すっかり縮かんでしまったチンチンに、リングがはめられた。

「気をつけ！」

腹の底から響くような声で号令をかけられて、反射的に背筋を伸ばした。

チンチンの皮をむき下げられて（名誉のために言っとくけど、仮性だからね。勃起したら、亀頭はちゃんと露出するんだから）、カリクビの根元にリングが合わされた。

リングは幅が１ｃｍくらいの薄い金属で出来てて、横方向に溝が刻まれてる。リングを閉じてる金具に小さなネジがついてるのを、先生がドライバーで回す――と。

くうう……チンチンが締め付けられる。そんなに痛くないけど。ひねったら亀頭がもげるんじゃないかってくらいまでリングが小さくなった。

「明日まで射精を封じておく。努力すれば小便くらいはできるがな」

努力すればって……？　不安をかき立てられる。

「明日は、授業が終わったらさっきの公園で待っていろ。夜までたっぷり鍛えてやる」

そうか。担任だから、家庭の事情ってのは知ってるんだ。

パパの後妻さんは、１００キロほど東にある実家に里帰り中。あっちのほうが、大都会なんだよね。私立一貫教育校なんてのがあって、そこの付属幼稚園に通ってる勇斗（異母弟てやつ）の面倒を見るために、一年前からずっと。なので、パパも一週間おきに週末は、あちらに泊まってる。今週は、あちらの番。だから、土曜の夜に僕の帰宅がいくら遅くても、問題はない。

でも。半ドンで、午後から夜まで……どんな鍛え方をされるんだろ。すごく不安なのに。リングに締めつけられたチンチンがすごく痛くなってくる。

帰宅したときには午後８時ちかくなっていたけど、窓の明かりは全部消えてる。パパは

モーレツ社員てやつで課長さんで、部下全員が退社するまで会社に残っている。しかも通勤１時間半。８時前に帰ってきたりしたら、体調が悪いんじゃないかと心配しちゃう。

月曜と木曜に来る家政婦さんが作り置きしてくれてる総菜をレンチンして、すっかり遅くなっちゃった晩ご飯を食べて、お風呂もさっさとはいって。

お風呂にはいる前に、先生が言った『努力』の意味が分かった。おしっこが、ふつうには出来ない。便器に腰かけて、うんと息を吸ってお腹に圧力をかけると、パッキンの緩んだ蛇口から水が漏れるくらいにチョロチョロと出てくる。出し終わるまでに５分もかかった。明日は水分を控えなくちゃ。

だけど、ほんとうの試練は深夜から始まった。チンチンの激痛で目が覚めたんだ。朝勃ちじゃなくて夜勃ち。３日もオナニーをしてないせいだ。だから、H気分が我慢できなくて、あんな冒険をしたんだけど。ほんとなら、サポーターを着けて床オナを試す予定だった。それが出来なくなったせいだ。３日連続のオナ禁なんて、初めてだよ。

目が覚めたら勃起も治まったけど、１時間もすると激痛で飛び起きる。そんなことをずっと繰り返してたから、寝不足もいいとこ。

サポーターなんかよりずっと変態的なことをしている（させられている）っていう緊張と興奮のおかげで、授業中に居眠りなんかはしなかったけど。授業の内容が頭を素通りだったから、先生にしかられなかったという点を除けば居眠りと同じだった。

２．ブルマ

放課後は、いったん家に帰って。カギっ子なんて言葉を思い出したりして。

昼ご飯は抜いて来いって言われてる。生理的にはお腹が減ってるんだけど、何か食べたいって気にはなれない。

午後３時ぴったりに、昨日の公園。わざと、裸の上に学ランだけ着たりしている。

どんなふうに鍛えられるんだろうかって、期待は２割くらいで、あとは不安と恐怖。だって、オナ禁だけで、このリングだよ。すでに拷問。もっとずっと厳しいことをされるに決まってる。

土曜日だから、狭い公園は小さな子供たちであふれてる。球形の回転ジャングルジムは、数年前の僕くらいの子供が鈴なりだし、ブランコは順番待ちの行列。ウンテイにぶら下がってる女の子はパンツ丸見えだけど、それをずっと眺め続けるほど僕はガキじゃない。そりゃ、すこしは見詰めてしまうけど。

みんな天真らんまん健康はつらつ。

ぼくだけが、エロエロな妄想でもんもんとしてる。

いきなり肩をたたかれて、ぎくっと振り返ったら。先生がいた。

出口とは違う方角へ歩き始めた。のについて行ったら、近くのスーパーマーケットの駐車場。３ナンバーのごつい車（ランドクルーザー）に先生が乗り込んだ。何も言わないし合図もないけど。乗れってことだよね。

なんとなく人目をはばかって、急いで助手席によじ登った。

先生は無言で車を発進させた。ずっと無言。僕も、質問をする気分じゃない。

郊外へ出て１５分ほど走ると、マンションの並んだ新興住宅街に着いた。先生は駐車場に車を停めて、まだ無言のまま、マンションに向かう。僕も以下同文。

エントランスのテンキーで暗証番号を打ち込んでドアを開けて中にはいって、エレベーターで最上階。廊下の端にある部屋のドアを鍵で開ける。

え？　ここも先生の家なの？

先生がはじめて僕を振り返った。腕をつかんで、部屋に引き入れた。

そんなふうにされると、僕が先生について来たんじゃなくて、先生に連れて来られたっていうか拉致された気分になる。すでにドキドキしてる心臓がバクバクになる。

左右にドアのある短い廊下の突き当りはアコーデオンカーテンになってる。それも開けられて。

（……？！）

まともな部屋じゃなかった。テレビと応接セットはあるけど。部屋のまん中には小さなジャングルジム。天井から鎖が垂れているし、部屋の隅には十字架をふたつ組み合わせて『キ』の字にしたような等身大以上の……これ、ハリツケ柱かな。鎖とか革ベルトがゴテゴテしてるルームランナーとか、横長の一輪車みたいな器械とか、ボクシングのサンドバッグとか。

これだけだと、よく分からない部屋だけど。壁の一面には、いろんな種類のムチとか手錠とか縄とか革バンドとかが、びっしりと掛けられている。これと部屋の器具とを組み合わせて考えると……拷問部屋？　調教室？　プレイルーム？

やっぱり。先生って、そういう人だったんだ。

ぽかんと口を開けて突っ立って、部屋の光景に目を奪われていると。お尻をバシンとたたかれた。前につんのめって四つんばいになったくらいの勢い。すごく痛い（という形容詞をこれくらいで使っちゃいけないと、すぐに思い知らされることになるんだけど）。

「マゾガキが、いつまでも人がましい格好をしてるんじゃない。この部屋では素っ裸が、おまえの普段着だ」

絶対に学校の先生じゃない台詞。声もドスがかってる。

「あ、はい……」

あわてて（けっして、いそいそじゃないよ）学ランを脱いだ。

「制服の下は素っ裸か。用意のいいことだな」

嘲笑われたんだろうけど、なんだか褒め言葉みたいにも聞こえた。

ズボンの下は、今日はまともなブリーフ。チンチンをリングで責められてるのに、改造サポーターで締めつけるなんて――実験してみて、３０分以上の装着は無理だと身に染みた。あ、ブラブラさせてるとリングが痛いので、ブリーフは必須だった。

素っ裸になって先生と向き合う。

「整列休め」

体育の授業ぽく号令をかけられた。ので、自然と身体が反応した。組体操の準備姿勢。足は真横に３０ｃｍ開いて、両手は腰の後ろで組む。全裸でこの姿勢になると……すごく無防備なチンチンを突き出してる感じ。Ｈな――じゃなくて、マゾな気分になってくる。

先生は僕の目の前で服を全部脱いで、またフンドシを締めた。今日のは、布の幅が１５ｃｍくらい。玉も棒も隠れてるけど、両側にジャングルがはみ出ている。

テレビを載せている台の引き出しから取り出した（キッチン用かな？）ゴム手袋をはめて、僕のチンチンをつまんだ。

「だらしないな。ここは常に直立不動にしておけ」

そんなことを言われても……あ、さわられたせいで硬くなってきた。

「おまえは、自縛だと簡単に自分でほどいてしまえるのがつまらないとか言っていたな」

実は、昨日なにを白状したか詳しく覚えていない。洗いざらいしゃべったんだから、たぶんそんなことも言ったんだろう。

先生が壁から縄束を持ってきた。

「本物の緊縛を教えてやろう」

背後に回り込んで、整列休めで組んでいる両手をさらにねじ上げた。

手首に縄が巻きつく。きゅうっと絞られて、もう自分ではほどけない。さらに二の腕もまとめて胸にも縄がまわされた。息苦しいのは、縄のせいだけじゃない。頭がぼうっとしてくる。股間に血液が脈打って流れ込んで、リングで締めつけられているのに、亀頭がふだんの勃起の５割増しくらいになってる。

「縛られるだけで、これか。おまえはどうしようもなマゾだな」

ざらざらしたゴム手袋で亀頭をなでられて、腰の奥で激しい切なさがつのってくる。射精のサイン――だけど、もどかしい痛みだけがふくれあがるばかり。

「おまえはこれからトクタイセイトとして扱ってやる。特別に虐待するリッシンベンの性徒だ。分かったな」

言葉の意味は分かった――と思う。だけど、どんなふうに虐待されるのかイメージでき

ない。できなくても、いい。僕なんかには想像もつかないような、いろんなサディスチックで変態チックなことをされるんだろう。ますますカリクビが激痛にさいなまれる。

ぼうっとした頭のまま、僕は返事をしていた。

「……はい」

「これからは、俺の命令には絶対服従だ。いいな」

「はい……」

先生がフンドシの布を左右に割って、ペニスを突き出した。斜め４５度にそり返って、僕の勃起の３倍くらいに大きい。

「そこにひざまずけ。俺のオチンポ様に誓いのキスをしろ」

ぼくは素直にひざまずいた――というか、すとんと床に膝をついた。ジャングルのまん中から突き出ている大木に顔を近づけると、むわあっと生臭い刺激が鼻にあふれた。

こんなことをしたら、もう引き返せなくなる。そう思いながら、僕は先生の亀頭に唇を押し当てた。

「オママゴトじゃないんだ。根元までくわえろ」

キスだって、唇と唇の接触だけじゃなく、舌を絡ませるフレンチキスなんてのもある（と、クラスメートの誰かが言っていた）。それと同じだよね。

僕は口を大きく開けて、先生のペニスをあむっとくわえた。味は、ほとんど感じなかった。きゅろんとした舌ざわりが、あまりＨぽくない。でも、やっぱり。Ｈなこと、いけないことをしているんだという意識が強い。涙が出そうになるほど、カリクビが痛い。

「じきにいろんなテクニックを仕込んでやるが、今のところは――絶対に歯を立てるんじゃないぞ。かんだりしたら、リングをもっと締めつけてやる」

そんなことされたら、ほんとうにもげちゃう。

「んん、ん……」

ペニスをくわえたまま、僕はうなずいた。鼻の穴を毛でつつかれて、クシャミが出そうになった――のは、必死でこらえた。

「ちょっと厳しいぞ」

先生が両手で僕の髪の毛をつかんだ。そして、頭を激しく揺すぶり始めた。

「んん……んゞんゞんゞんゞ！」

喉の奥を突かれて、吐き気がこみ上げた。直後に、エラの部分が唇をこすった。それを何度も何十回も繰り返される。頭ががくがくして、脳震とうを起こしそう。

顔の角度をさまざまに変えられて――上顎の裏をしごかれたり、ペニスの裏側で舌を押さえつけられたり。くしゃみが出そうだし吐き気はつのるし、涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃになった。

２分か３分は、それが続いた。

口の中で亀頭がぐぐっとふくれあがった――ような気がした。

「出すぞ。ちゃんと飲み込め」

切迫した声と同時に、喉の奥に衝撃を感じた。口の中に射精されたんだ。ますますつのる吐き気を、息を止めてこらえた。喉から舌先まで、どろっとした感覚があふれる。鼻の中まで生臭い。

先生は動きを止めている。でも、髪はつかんだまま。

「一滴残らず飲み干せ」

息を止めたまま舌の根っ子を動かして、口の中の粘っこい液体をごくんと飲み下した。

「まだだ。中に残っている汁も吸い出せ」

唇を突き出しほほをすぼませて、ペニスを吸った。どろりと、舌に汁が垂れた。

それも飲み込んでから。やっと先生は髪の毛を放してくれた。

だけど、ここまでは誓いの儀式。ここからが『特別な虐待』の始まりだった。

先生は、まだ半勃起しているペニスをフンドシにしまって。僕をアグラに座らせた。そして、足首を引き上げて反対側の膝に乗せた。ふつうのアグラよりずっと両足が開いて平べったくなった。それだけでも、自分では足を元に戻せないのに。交差しているスネを縄で縛った。

「今度はおまえを楽しませてやろう」
　ウズラの卵を縦に引き伸ばしたような道具を、部屋の隅に置いてある小箱から何個も取り出した。卵の端から細いビニール電線が伸びて、リモコンボックスにつながってる。
「これを知っているか？」
　僕は首を横に振った。知ってるけど、カマトト。
「これはピンクローターという。病みつきにならなけりゃいいがな」
　先生は輪ゴムをピンクローターの胴体に絡めて、それを別の輪ゴムにつないで、みっつを束にした。輪ゴムを引き伸ばして、それを僕のチンチンに通した。まるでロケットのブースターみたいな形になった。それから、別のピンクローターを玉と玉とのあいだに押し込むと、玉袋にガムテープを貼り付けてずれなくした。
「いくぞ」
　四つのリモコンが、同時にＯＮになった。
「う゛わ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛……！」
　強烈な振動。快感が股間で爆発した。強烈――じゃなくて、凄絶。
　痛い。カリクビが千切れそう。腰の奥で切なさともどかしさとがうねくっている。
「お願い……出させて！　出したい！」
　これ以上射精を封じられてたら、気が狂っちゃう。
「なにを出したいんだ。はっきり言え」
「精子です！」
「ほう。精子だけを出せるのか。器用なやつだな」
　ペニスから出るのはチンポ汁で、精子はその中で泳いでいる――なんてこと、どうだっていい。
「精液です！　射精したいんです！」
　からかわれてるんだろうけど、必死に訴える。
「保健の授業じゃないんだ。チンポ汁と正しく言え」

絶対に正しくない。それに恥ずかしい。でも、言うしかない。

「チンポ汁を出したいんです！　出させてください！」

半泣きで訴えた。

「出すと、後がつらいぞ」

そんなこと、知らない。今がつらいんだよ！

「いいです。お願いだから、チンポ汁を出させてください。このリング、はずしてください」

振動が止まった。激痛だけがわだかまって、快感が消え失せた。射精したのかな――股間を見下ろすと、チンチンは直立不動のまま。どころか、お腹に貼り付いてる。

先生が小さなドライバーを持ってきて、僕の前に座った。チンチンをつかんで引き戻して、リングを締めつけているネジを緩めてくれた。

射精寸前でせき止められていたチンポ汁が、ドロッと滴った。

血流がよみがえって、ますます亀頭がふくれる。ジンジンとむずがゆい。

「はああ……」

大きなため息が出た。

でも、先生から僕への特別な虐待は、まだ終わっていなかった。後ろから肩を押されて、僕は床に転がされた。アグラを縛られた両膝と額の３点で身体を支える形。

先生が僕に見せつけるようにしてゴム手袋をはめて、指先に油のようなどろっとした液体を垂らした。そして、後ろにまわって。

「あっ……」

思わず叫んだのは、お尻の穴を指でつつかれたから。つつかれただけじゃない。ぐりぐりこねくられて、つぷっと突き立てられた。

「やめてください」

指が引き抜かれて。

ぼすん。お腹を殴られた。うつ伏せになっている下から突き上げられたから、そんなに

強くはなかった。それでも。
「ぐええ……」
　腹筋を固める暇もなかったから、奥までめり込んだ。胃液が口からこぼれた。
「絶対服従を誓ったはずだ。おまえに拒否権はない」
　あの誓いの儀式はゴッコ遊びなんかじゃなかったんだ。
「ごめんなさい。もう言いません」
　自然と、それっぽい言葉が出てしまった。
　ずぶずぶと指を突き立てられても、今度はおとなしくしていた。実のところ、Hなことをされて恥ずかしいけど、そんなにいやじゃない。マーカーペンを自分で挿れたことくらいあるから、先生の指なら余裕だし。自分の意思とは切り離された動きが、新鮮で刺激的。というのは、もちろん黙っておくけど。
「いずれはアナルバージンを奪ってやるが……まだ、こなれていないな」
　初めて聞く言葉だけど、アナルもバージンも、それぞれは知っている。だから、ドキンとゾワアッが同時に来た。オカマとかホモ（どう違うのか知らない）は、そんなふうにするんだってことは、雑誌で読んで知っていた。僕はホモでマゾだから、やっぱりお尻の穴にペニスを突っ込まれるんだと――納得してしまった。でも、痛いんだろうな。
　先生の指が、お尻の穴の中をかきまわす。あまり気持ち良くない。すこし痛い。
　でも、すぐに抜いてくれた。
「ぼつぼつ、本格的にチンポ汁を吐き出させてやろう」
　え？　さっき出たんじゃ……
「う゛わ゛あ゛あ゛あ゛あ゛……！」
　ロケットブースターが振動を始めて、また凄絶な快感が爆発した。
「あああっ……！」
　甲高く叫んだ瞬間、ものすごい射精が腰の奥からチンチンの先っぽまで走り抜けた。オナニーとは比べものにならない、過激な快感。それが、びゅくびゅくびゅくびゅくっと、

何秒も続いた。チンポ汁が胸にまで飛び散って、床に垂れた。
「はあああああああ……」
　ものすごい幸せ。は、長く続かなかった。
　うつ伏せでお尻を高くつき出した姿勢から引き戻された。股間に巻きつけられていたブースターが取り払われる。先生はスネの縄をほどいて、胸に飛び散ったチンポ汁をティッシュで拭き取ってくれた。ちょっとでも先生がやさしかったのは、その一瞬だけ。
　丸めたティッシュを口に突きつけられた。
「自分で汚したんだ。自分で始末しろ」
　そんなの、やだよ。反抗的というか恨みっぽいというか、そんな目つきで先生の顔を見て。口は閉ざしてた――ら、お腹に握りこぶしを押しつけられた。
　あきらめて、口を開けた。押し込まれたティッシュを、もごもごかんで、口の中に唾をたくさん集めて、なんとか飲み込んだ。喉にへばりつく。微妙に甘く感じるのが、むしろ違和感。ちっともHぽくないし、マゾっぽい気分にもならない。射精したあとは、後悔ばかり。
　だけど、先生の特別虐待は続く。
「床もきれいにしろ」
　手を縛られててティッシュもなければ、なめ取るしかない。お腹に脅しをかけられる前に、僕は床に腹ばいになって、点々と飛び散っている白濁に舌を伸ばした。腐った牛乳に塩素を混ぜたような臭いと味だった。
　床掃除も終わって、やっと後ろ手の緊縛もほどいてもらえたんだけど。まだ陽は高い。夜まで特別虐待は続く――のかな？
「昼飯を食いに出かけるか」
　射精でHもマゾも蒸発してるから単純にホッとしたんだけど、拍子抜けしちゃった。のは、早計だった。
「おまえのために用意してやったんだ」

これを着ろと、床に投げ出された服を手に取って。

（え……？）

デニムの半ズボンとランニングシャツ。半ズボンは海水パンツみたいに裾が浅いＶ字形に切り上がってる。ランニングシャツは白地で胸のところに花がプリントされてる。その花が三色スミレ（パンジー）で、英語のスラングだと男色を意味するんだってのは、ずっとあとで教えてもらうんだけど。それはともかく。

問題はサイズ。半ズボンは、発育のいい小学生だと無理なんじゃないかってくらいに小さい。ランニングシャツも丈が極端に短い。

絶対服従で拒否権はないんだから、きつきつを無理して、身体をねじ込んだ。

「ふん。なかなかにビショウネンだな。どっちも女偏のほうだが」

意味が分からなかったけれど、からかわれてるのは分かった。

責め道具がいっぱい並べられてる壁の向かい側にはカーテンがかかっている。それが引き開けられると、壁全体が鏡になってた。その前に立たされて、ビショウネンぶりを見せつけられた。

ソケイ部がすこし見えてるし、後ろは下側が半ケツ（ブリーフははいてない）。小さいのを無理してるから、上もお尻の割れ目ぎりぎり。半ズボンてより、女の子のセクシーなホットパンツみたいだ。ランニングシャツは、裾とヘソのあいだが５ｃｍは空いている。ぴちぴちだから、生地に乳首が浮き上がってる。

髪の毛がもうすこし長かったらペチャパイのボーイッシュな女の子に見間違えられるんじゃないか――なんて思ったのは、やっぱナルシスてやつかな。腰のくびれとかヒップの張り具合が男と女とでは根本的に異なるって気づくのは、もすこし先の話。

とにかく。こんな格好で外出するなんて……露出プレイとか羞恥責めなんて言葉を思い浮かべたのは、すこし回復してきたせいかも。

女の子が履くような、ヒールがついたサンダルまで用意されていた。ユニセックスというかユニＳＥＸぽい格好で連れ出された。

マンションから出るまでが、いちばんドキドキしてたかな。僕はかまわない（こともない）けど。こんなオカマっぽい男の子を連れてる先生を住人が見たら、なんて思うだろう。それが心配だった。落ち着いて考えれば、取り越し苦労だね。ドアには表札を出してないし、住んでる人が学校の先生だってことを、誰も知らないんじゃないかな。

ランクルで街中に出てハンバーガーショップへ行ったときは、わりかし平気だった。学区から離れてるから、顔見知りに出くわす心配はない。旅の恥はかき捨て、みたいな。

まあ、たしかに。僕が意識してるから気づいたのかもしれないけど、ちらちらと視線を向けられてくるのには――むしろ、ぞくぞくしちゃった。女の子と間違えられてるてことは、ないだろう。変な格好をしている男の子とは思われたろうけど、ホモでマゾな変態少年とまでは、思われたくないのか軽蔑されたいのか、自分でもよく分からない。

そんなことばかり考えてたから、初体験のハンバーガーの味は、ちっとも分からなかった。それよりも、リングから解放されている~~物足りなさ~~解放感のほうが、ずっと心地よかった。

そして、マンションに連れ戻されて。この部屋での普段着（つまり全裸）になって。

「今度は手錠の味を教えてやろう」

右の手首と足首、左の手首と足首を、それぞれ手錠でつながれた。輪っかのところがふわふわなモールで包まれてるから、ちっとも痛くない。けど、足を開いた体育座りみたいな姿勢にされて、ちょっと窮屈。

「これがなんだか分かるか？」

傘の閉じたキノコみたいな器具を見せられた。プラスチック製で、直径は２０mmくらいかな。傘の部分は、もうすこし太い。

「分かりません」

使い道は想像がついたけど、Hな雑誌の通販でも見たことがなくて名前を知らないんだからウソじゃない。

「分からせてやろう」

僕は前に押し倒された。両腕とスネで身体を支えて、お尻を高く突き上げた姿勢。顎が床について、顔は正面を向いている。

その僕の目の前で先生は小さな瓶を開けて、クリームのようなものを指ですくってキノコに塗りつけた。やっぱり、想像した通りの使い方だ。

先生が後ろへまわって、キノコをお尻の穴に押し当てたとき、だから僕はちっともうろたえなかった。

「はあああああ、はあああああ……」

体の力を抜いてゆっくり深呼吸をした。マーカーペンで覚えたんだ。

「ふん。すっかり分かってるじゃないか。それなら、遠慮はいらんな」

ずぶずぶずぶっと、キノコを押し込まれた。

「はああ、あう……」

鈍い痛みが合って、ちょっとだけうめいてしまった。でも痛みよりも、いけないことをしている（されている）っていう、こういうのをなんていうんだっけ。背徳感？　それで、すっかりＨでマゾな気分になってしまった。

「これから、すこしずつ大きなプラグに替えていく。明日からも、家にいるあいだはずっと挿入しておくんだぞ」

「はあい」

なんか間の抜けた返事をしちゃった。

先生の手で引き起こされて、身体の向きを変えられた。正面には大型のテレビ。

「しばらく自習していろ」

画面が明るくなって、１０秒くらいは砂嵐だったけど。

「え……？」

画面に映った映像を見て、思わず声を出してしまった。

小さなジャングルジムに、若い男の人が全裸で大の字に縛りつけられていた。僕よりも年上で、でもオトナって感じでもない。うん、お兄さんかな。オトナは、その人の左右に

カメラに背中を向けて立っている。ひとりは中年太りで黒いパンツをはいている。もうひとりは引き締まった筋肉質の男性で白いフンドシを締めている――ていうか、戸坂先生だ。

そして、お兄さんが縛りつけられてるのは、僕の斜め後ろにあるジャングルジム。つまり、この部屋での調教を記録した映像だ。もしかして……今の僕も隠し撮りされてるんだろうか。

「先に楽しい思いをさせてやるよ」

黒パンツの人が細長い何かをもって、お兄さんに近づいた。

「それは……赦してください」

お兄さんが弱々しい声で訴える。でも、説得力がない。ペニスが高射砲みたいになってるんだもの。あれ？　高射砲陣地はのっぺらぼうだ。まさか、まだ生えてないってことはないよね。そってるんだ。

そのことに、僕はまったく違和感を持たなかった。だって、ＳＭ雑誌のモデルさんは、だいたいパイパンにしてるもの。あ、ＳＭ雑誌はね。さすがに学ランを着てると駄目だけど、私服なら売ってくれる本屋さんもある。値段がコミック誌の５冊分もするから、持ってるのは２冊だけだけど。

あ、ホモの雑誌も同じ本屋さんで買って１冊だけ持ってるけど。フンドシを締めてたり股間が隠れるアングルだったりするから、よくわからない。

なんてことを考えてるうちに、黒パンツの人はお兄さんのペニスに、細長い棒を突き立てた。すごく長く見えるけど、綿棒かな。

「きひいいい……」

お兄さんが、小さな悲鳴をもらした。でも、ぎんぎんに勃起したまま。

先生がジャングルジムに潜り込んで、お兄さんのお尻に太い棒を突っ込んだ。カメラアングルが固定されてるからよく分からないけど、スリコギかな。あんな太いのが入るんだ。

先生がスリコギをこねくって、黒パンツの人が綿棒を出し入れする。

「ああっ……出ます。赦してくださいいい！」

お兄さんが腰をけいれんさせた。黒パンツの人が綿棒を引き抜くと――まるで噴水みたいに白い汁が宙に飛び散った。

ぐてっとなったお兄さんの左右に、黒パンツの人と先生が並んで立った。黒パンツの人は、細いリボンを何本も束ねたようなムチを持っている。先生は竹刀。

「では、祭りを始めるぞ」

黒パンツの人がムチを振り上げて。

バシイン！

ペニスの根元にたたきつけた。

「……」

お兄さんはびくっと身体を震わせたけど、黙って耐えている。

バシイン！　バシイン！　バシイン！

ムチの嵐。肌が赤く染まって、細長いひっかき傷みたいな筋が増えていく。

「どうした。元気がないな」

先生が竹刀でお腹をつついてから。グンッと突き入れた。

「うべっ……」

お兄さんが身を折ってもだえる。予告されて腹筋を固めてて、これだもの。不意打ちだったらもん絶してるね。

そうか。ハードだけどプレイなんだなって、納得した。でもプレイにしても……僕に耐えられるだろうか。こんなビデオを見せるってことは、同じように責めるから覚悟しておけっていう意味なんだと思う。

ムチは下腹部だけじゃなく胸にも足にも飛んで、じきに全身がムチ痕だらけになった。そしたら、今度は裏返しにハリツケられて。背中も同じように――黒パンツの人の台詞だと『両面焼き』にされちゃった。

それから、また正面向きに大の字ハリツケにされる。うわ……勃起してるよ。

「さすがに１０代は回復が早いな」

黒パンツの人が電気掃除機を持ち出した。

ふうん。年長者に遠慮してるのか、そこまでサドじゃないのか。先生は脇役って感じだ。僕を特別虐待するときも、控えめにしてほしい。

掃除機のホースの先のアタッチメントが取り外されて。スイッチが入れられた。

ブオオオオオ……ホースがペニスに近づいて。すぽんと吸い込んだ。

シュボボボボボ……ホースはお腹から５ｃｍくらいの距離で保たれている。勃起したペニスが激しく震えている。

「うあああああ……赦してくださあい！」

お兄さんが甲高く叫んで、がくっと脱力した。振動で射精したんだ。僕がされたピンクローターと、どっちが強烈なんだろう。

画面が数秒ほど砂嵐になって。つぎのシーンでは、お兄さんが四つんばいになってた。膝立ちをした黒パンツの人がお兄さんのお尻を抱えてて――身体を前後に揺するたびに、勃起したペニスが見え隠れしている。先生は正面に仁王立ちになって、お兄さんにペニスをくわえさせている。

お兄さんは黒パンツの人の動きに合わせて自分でも身体を前後に揺すってる。顔を振ったり口を大きく開けてくわえ直したり、ほっぺをすぼませてペニスをすすったり――ずいぶん積極的だ。でも、苦しそうな表情。それとも、陶然としてるんだろうか。横からのアングルだから、ペニスが勃起してるのが見える。

見てるうちにチンチンが硬くなってきた。僕もあんなふうにされてみたいって、実は思ってるんだろうか。

「ずいぶんと熱心に勉強しているな」

画面がまた砂嵐になったタイミングで、先生が僕の前に立った。

「感想はどうだ――と、聞くまでもないな」

お腹に貼りついているチンチンを、足でぐりぐりと踏みにじった。

そんなことをされると……亀頭が破裂しそうになっちゃう。

「ビデオはまだ続くが、ここから先は刺激が強すぎる。つぎは、これを見ろ」

カセットが差し替えられた。刺激が強すぎるっていう中身も見てみたいけど、やっぱり怖いかな。

新しいビデオは、女性がマゾの人だった。小母さんというとひっぱたかれそうだけど、僕の３倍くらいは、いってそう。きちんとスーツを着た女性が、カメラの前で服を脱いで全裸になった。すぐに土下座して。

「今日はキミエをうんと虐めてください。どんなに泣き叫んで慈悲をお願いしても、いっさい無視して、全身がボロボロになるまで、オマンコの泉が枯れ果てるまで、涙で顔がグシャグシャになるまで、皆様のお好きなように甚振ってください」

うわあ、すごい台詞。僕も、あんなふうに言わなくちゃいけないのかな。それに皆様って……画面には３人の男の人が映ってる。先生も、さっきの黒パンツの人もいない。画面が動いてるから、撮影係の人もいる。それが先生なのかな。

だけど、全部で４人だよ。「男男」るじゃなくて「男男男」るだ。

男の人は３人とも服を着ている。キミエさんの服は冬物ぽかったから、上着だけは脱いでるのかな。

キミエさんが立ち上がると、タートルネックを着た３０才くらいの男の人がアイマスクを着けさせた。

「捕虜のポーズ」

タートルネックの人が短く言うと、キミエさんは両手を頭の後ろで組んで肘を張った。両足も３０ｃｍくらい開く。整列休めより、もっと無防備。

キミエさんもパイパン。あれ……？　股間から赤紫色の鶏のトサカみたいなビラビラが垂れ下がってる。

あ、そうか……。小淫唇（小陰唇だっけ？）て単語が頭に浮かんだ。『家庭の医学百科』でみたイラストとは、ずいぶん違ってる。

おっと。キミエさんの前に３人の男の人が立った。タートルネックの人が教べん（プラ

スチックの細い棒で、先っぽがドングリみたいにふくらんでるやつ）を持ち、すこし離れた正面に立って腕組み。カメラの位置は、その斜め後ろに移動して、キミエさんにズームイン。あとのふたりが左右からキミエさんを囲む。

「３５ともなると、いいかげん乳も垂れてくるな」

５０才くらいかな。ワイシャツ姿の人が、片方ずつ乳房をつかんで、もむっていうかひねくりまわす。台詞は、言葉でなぶるってやつだろう。ボリュームはあるけど、垂れてるようには見えない。

（ふうん。僕の３倍まではいってないんだ）

冷静に（？）そんなことを考えたりもする僕。

もうひとりの、似たようなワイシャツ姿だけどずっと若い人が、お尻をこねくる。

「ケツもたるんでるな、オバサン」

「言わないでください」

キミエさんが、すごく怒ったような声で抗議した。

「それは禁句だよ」

タートルネックの人が言う。

「マゾメス、豚、淫乱女、ブス、デブ。どんなに罵ろうと、こいつは悦ぶ。だけど、年令に関する言葉は駄目だ」

ふうんと、思った。キミエさんはマゾでメスで、きっと淫乱なんだろう。だけど、デブじゃない。グラビアのモデルさんに比べたらぽっちゃりしてるけど、ふくよかって形容しても言い過ぎかなってくらい。そして、絶対にブスじゃない。

ほんとうのことを言っても逆のことを言っても、かまわない。でも年令だけはタブー。だけど……３５と言われたときは抗議してない。オバサンがいけないのかな。それとも、年上の人に言われるのはかまわないけど、年下から言われるのがいやなのかな。５０才の男性は３５才の女性に対してオバサンとは言わないだろうし。

なんて考察にふけってるあいだにも、ふたりの男の人はキミエさんをいじくり続けてる。

「あ……んん。もっと激しくしてください」

キミエさんも、怒ったことは忘れてマゾっぽい言葉をつぶやいてる。

それまでずっと傍観してたタートルネックの人が一歩踏み込んで、いきなり教べんを振るった。

ピシッと、音がした。教べんが割れ目をえぐって跳ね上がった。

「ひいいっ……！」

キミエさんが内股になって腰を引いて。でも、すぐ元の姿勢に戻った。頭の後ろで組んだ手は、そのまま。

また両側の人がキミエさんをいじくって。

「あ、ああ……」

ピシッ！

「ひいいっ……！」

それが何度か繰り返されて。とうとうキミエさんは両手で股間をかばった。

「姿勢を保つこともできないのか」

タートルネックの人が画面の外から手錠を持ってきた。手錠の鎖には分厚い首輪がつながっている。それを首に巻いて、捕虜のポーズに戻ったキミエさんの手首に手錠をかけた。これで、キミエさんは手を下ろせなくなった。

キミエさんのアイマスクがはずされた。３人の男の人たちが、いろんな道具を持ち出してきて、目の前でセットする。ルームランナーが２台平行に並べられて、その間に円柱が立てられた。円柱の表面には、鋭い円すい形の突起がたくさん植え付けられている。

命令されて、キミエさんがルームランナーに乗った。円柱が伸ばされて、キミエさんの股間に突き刺さった。

「あああ……痛いです」

なんだか、うっとりしているように聞こえる。マゾだから、女性器を虐められて悦んでいるのかな。

円柱の長さが調節されてネジで固定されて。円柱には十字架を逆にしたような横木が根元についている。その先に短い鎖と鉄の環がつながっていて、それが足首に留められた。そして、天井から垂れている太い鎖に首輪がつながれた。

ふっと部屋の天井を見上げると、同じ鎖があった。大きな滑車に巻きつけられている。

「しっかり歩けよ。倒れたらマンコが串刺しになるか、つるし首になるか――助けてはやらんぞ」

画面の中では、ルームランナーが動き始めている。キミエさんは、いやおうなしに歩かなければならない。

じゃらん、じゃらん、じゃररररん……

キミエさんが足を動かすたびに鎖が鳴って、鎖に引っ張られた円柱が左右にねじられる。

「くううう……痛い痛い痛い……つらいですううううう」

キミエさんが、泣き声を漏らした。それでも足を止められない。歯を食い縛って歩き続ける。

なにがそんなに痛いのか、すぐにはわからなかったけど。円柱にたくさんのトゲが植えられているのを思い出した。足を前後に動かすと、円柱が回転する。とうぜん、トゲが女性器の中をえぐる。凄まじい拷問だ。

「痛い痛い……きひいいい……くううう……あああああああ」

泣き声が微妙に変わってきた。

あれ……？　股間からとろっとした汁が垂れて、ももに伝っている。愛液、かな？　初めて見た。というか、女の人の生の股間を見るのも、これが初めてだけど。

いじられて不本意に蜜をしたたらせるとか、女の「いや」は「いい」と同じとか――エロ本で仕入れた貧弱な知識が、つぎつぎと頭に浮かんだ。そして……お兄さんが虐められているのを観ていたときと同じかそれ以上に、僕は勃起している。

女の人が虐められて（悦んで）いるのを見て興奮するなんて、僕ってサドっ気もあるんだ――ということは、実はわかっている。だって。小さな女の子に虐められるシーンなん

か、妄想しないもの。小さな女の子と僕だったら、僕が虐める側にまわる。弱肉強食が生存競争の基本定理だものね。

「あっ、あっ、あっ、あっ……」

キミエさんの足の動きが速くなってる。実際にはルームランナーの速度が上げられて、キミエさんは必死についていってる。ほとんど駆け足。両手を振ってバランスをとれないし、腕のぶんだけ重心も上がっているから、今にも転びそうなくらい身体がよろけてる。ますます、厳しく股間をえぐられる。

じゃらら、じゃらん、じゃらじゃらじゃら。鎖の音も大きく速くなってる。そしてキミエさんの顔は、だんだん……苦しいんだろうか、こうこつとしてるんだろうか、僕には分からない。

不意に画面が消えた。

「自習の時間は終わりだ。特訓を始めるぞ」

また前に押し倒されて、お尻からプラグを抜かれた。

「汚れているな。次からは、挿入する前によく洗え」

キノコ形の傘の部分に茶色い汚れがこびりついている。鼻先に突きつけられて、僕は息を止めた。自分の汚物を嗅がされるなんて、Hな方面とは無関係に恥ずかしい。

手錠をはずされて。

「汚れを落としてこい」

入口とは別のドアが開けられた。そこは――（え？！）って心の中で叫んだくらいに広いバスルームだった。とにかく広い。幼児だったら泳げるくらいのバスタブと、じゅうぶんにナポレオン（５人くらいで遊ぶトランプ・ゲーム）ができそうな洗い場。壁には、プールなんかで使うエアマットが立てかけてある。

長時間体育座りの形に拘束されていたのと、お尻の気持ち悪さとで、キミエさんみたいにへっぴり腰のガニ股でそっちへ歩いた。

バスルームには、このドアと直角の面にも別のドアがついてる。間取りから考えると、

そっちは脱衣室で、その向こうが玄関の短い廊下につながってるんだと思う。

間取りはどうでもいい。

広いバスルームの隅っこで、シャワーを使ってちょこまかとお尻を洗った。穴にも指をすこし挿れて、中もきれいに。壁のタオルかけにあったフェイスタオルで下半身を拭いて、部屋に戻った。

「これを着ろ。下着はつけるな」

渡されたのは体操服。ただし、女子用。半袖のシャツ（男女兼用）とブルマ！

あれ？　このブルマ、なんだかおかしい。裏も表も同じ色。裏地がついてない。そして、生地がつるつるしてる。なんて疑問は棚上げして、とにかく足を通した。

引き上げてみると、すごくきつい。そして、ウエストラインていうのか腰丈ていうのか、それが浅い。しかも股ぐりが深い。さっきのホットパンツと同じだ。

サイズが小さくてきついし、生地がすべすべで刺激がすごい。

（朝鮮出兵ミグ１機。いい国作ろう鎌倉幕府。いよう国が見えたとコロンブス……）

できるだけＨとは反対方向のことを考えて勃起を（すこしは）鎮めて、チンチンをブルマに押し込んだ。でも、やっぱり下に引っ張られるし、体操シャツも短いので、ヘソからチンチンの付け根近くまでが露出してしまった。

履かされた運動靴は男子用。といっても、足の甲を押さえるゴムバンドの端と爪先が赤いか青いかの違いだけ。

「整列休め」

僕を立たせといて、先生はムチなんかと一緒に壁にかけてある竹刀を手に取った。竹刀――の玩具かな。８０ｃｍくらいしかないし、プラスチック製に見える。

「これなら、そうそう文句を言うやつもいないからな」

先生が僕の後ろにまわって。

ビシッ！

お尻をたたいた。

痛い。でも、最初に部屋へはいったとき平手でたたかれたほどじゃない。

だけど。外へ連れ出されるとわかって、やっぱり文句を言いたくなった。絶対服従だから言わないけど。

「この先の公園までランニングだ」

ぱしんと軽くお尻をたたかれて、僕は走り出す。

すれ違う人は、ちょっと驚いた顔で僕を見て、その後ろにいる先生を見てなんとなく納得したようなしないような顔になる。先生はジャージ姿だから、生徒をしごいている運動部のコーチとでも思うんだろう。

ああ、そうか。玩具の竹刀だから、気合を入れるためにたたいてもそんなに痛くないと思うんだろう。

「ほら、ピッチが落ちた」

ぱしん。

「もっと足を蹴りあげろ」

ビシイッ！

人目があるときに限って、先生はたたく。いくら玩具でも、けっこう本気でたたいてるらしくて、それなりに痛い。

痛いのよりも。女子の体操服を着ている恥ずかしさと、人前でたたかれる……恥辱ってのかな。そのせいで治まりかけてた勃起が復活しちゃって、それがいちばん恥ずかしい。暗いから、はっきりとは見えていないだろう……と、思いたい。

勃起で仮性包茎の亀頭が露出して、それをブルマに締め付けられて、すべすべの生地にこすられて……あともうちょっとの刺激で射精してしまいそう。なのに、もうちょっとがない。自分の手を股間へもっていきたいけど、たとえ先生にしか見られていなくても恥ずかしい。それに、こんなところで射精したら跡始末に困る。いくら暗くても、人に気づかれるだろうし。走り続ける気力が失せてしまう。

そんなことばかり考えながら、何人とすれ違ったか何人を追い越したか、まるでわから

なくなって走り続けて。公園に着いた。

公園は、先生の調教部屋のバスルームと同じで、やたらと広い。このあたりは新興ベッドタウンとして開発中で、将来はずっと子供が増えるだろうから、それに備えてるのかもしれない。でも、遊具は現在の子供の数に合わせてあるみたい。

砂場に連れて行かれた。水飲み場から水を（置き忘れられてる砂遊び用のバケツで）くんできて砂を踏み固める――のは、僕の仕事。その真ん中に、先生が竹刀を突き刺して深い穴を開けた。

「粗チンを出せ」

わけが分からずにブルマをずらすと――勃起しっぱなしのチンチンが飛び出る。

「腕立て伏せの姿勢で、穴に突っ込め」

と言われても。チンチンがお腹に貼りついているから、片手で身体を支えながら、無理矢理に押し下げて、なんとか言われたとおりにできた。

「腕立て伏せ、始め」

腕を曲げた瞬間、亀頭に鋭い痛みが走って反射的に腰が引けた。

バッシイン！

「痛い！」

叫んでしまった。それくらい痛かった。ランニング中は水平のスイングでたたかれていたけど、これは上段からの打ち下ろし。威力が違う。

「腕立て伏せだ。ほら、イチニ、イチニ」

腰をぐいぐい踏まれて、激痛をこらえて腕立て伏せをする。じきに穴の形が崩れてきて、亀頭の激痛がやわらいできた。あ、これ……けっこう気持ちいいかも。

腰の奥で射精感がふくれあがってきて。僕は自発的に腰を動かしだした。

いきなり、まぶしい明かりに照らされた。

「そこで、なにをしているのですか？」

ていねいだけど、威圧的な声。

動きを止めて顔を上げると――ふたつの黒い影に向かい合っている先生のシルエットが見えた。

「ああ、ご苦労様です。この子は、うちの生徒でしてね」

黒い影は、お巡りさんだった。パトロール中の職務質問。

「女子生徒のブルマを盗んだので、罰を与えているところです」

泥棒にされちゃったよ。

「しかし、これは……？」

懐中電灯の光が、僕に向けられた。地面にうつ伏せになってるし、ブルマはお尻に引っかかってるから、公然ワイセツ物陳列罪にはならないと思う。

「諸悪の根源は性欲ですからね。勃起や射精に痛みが伴うと悟らせれば、条件反射的に性欲をコントロールできるようになります」

怪しげな理論だけど。学校と先生本人の名前は、ちゃんと答えて。学区から遠くに来ているのは、僕が知り合いに出くわすと悪い評判が立つからだとか。

「いや、この子の名前は勘弁してやってください。当人の心にトラウマとして残りますから」

とうとう、お巡りさんを納得させちゃった。

「先生の教育方針に口をはさむつもりはありませんが、学校の外ですからね。配慮を願いますよ」

もう一度、僕（のお尻）を懐中電灯で照らしてから、お巡りさんは引き上げた。

学校の中なら配慮しなくてもいい――ようにも聞こえるけど。実際にその通りだよね。長髪禁止の学校だと違反者を全校集会の場で丸刈りにしたり、うちの学校でも学級費を盗んだ疑いをかけられた女子を、教員室で全裸検査したりとか。

その女子（１コ上の学年）は、今ではアッケラカンと通学してるけど。もしも僕が、あのサポーターだけで廊下に立たされたりしたら……家出するか自殺するかも。

お巡りさんがいなくなってから腕立て伏せを再開させられたけど、今度は楽にできた。

つまり、すっかり委縮しちゃって復活しなかった。
「根性が足りんな。まあいい。おいおいに鍛えてやる」
　根性といっても、それはマゾ根性じゃないかな。それと露出根性かな？
　ブルマをはき直して、マンションまでランニング。それで、今夜の特訓はおしまい。有罪放免になった。
　無罪放免じゃないのは――また、チンチンにリングをはめられて、アナルプラグまで挿れられたから。しかも、もっと大きなプラグまで持たされた。月曜からは直径２５mmのプラグ。金曜には３０mmを挿れるように言われた。
「学校でも抜き打ち検査をするかもしらんぞ。ズルはするなよ。もっとも、ズルをして苦しむのはおまえだがな」
　先生の勃起は、３０mmよりずっと大きいから、意味は明白だった。

３．８の字バンド

　日曜日は、おとなしく家で過ごした。オナニーはリングで封じられているし、そうなると独り遊びをする気にもなれない。
　あ、でも。月曜からって言われていた直径２５mmのプラグを試してみるくらいのことはした。圧迫感ていうか、内臓が押し上げられるような感覚があって、キノコの傘が通過するときは熱くて痛かったけど、軸の部分だと長時間でも耐えられた。
　３０mmのほうは、さすがに無理だった。どんなに（サラダ油とかバターとかで）潤滑しても、穴のまわりの筋肉まで巻き込むみたいになって、全身に脂汗がにじむくらいに痛かった。
　でも、慣れって恐ろしいもんだね。先生に言いつけられてた金曜の夕方には、２５mmを何度か抜き差ししてからだと、ぎりぎり入っちゃった。キノコの傘に糸を巻き付けて物

差しで計ったら１１０mmあったから、傘の部分は３５mmだ。３５mmが通過したあとの３０mmは、痛いというより巨大な違和感かな。ちゃんと眠れたもの。リングも緩めだったから、寝てるときに勝手に勃起して締め付けられて飛び起きた――のは、１週間で５回だけだった。

だから、まあ。月曜から土曜の午前中までは、無事に過ぎた。抜き打ち検査なんて脅してたけど、先生はまったく僕をかまってくれなかった。それはそれで寂しいんだけど。実は嵐の前の静けさ。僕のマゾ気分を盛り上げ（て、精子をあふれさせ）る充電期間だったと、土曜の午後に思い知らされた。

またブリーフ１枚の上に制服という先週と同じ格好で午後４時に、先生のアパート近くの公園へ行った。ぐずついた天気だったので、念のために傘を持った。

ランクルで調教部屋のマンションに連れて行ってもらうというより、連行されたというほうが、雰囲気出るかな。

この部屋の普段着、つまり全裸になって。四つんばいで３０mmのプラグをちゃんと挿入してるのを確認してもらって。

「頑張っているな。感心感心」

ぐりぐりとこねくられたのは、頭をなでられたのと同じかな。でも、すぐに（予測はしていたけど）恐ろしいことを言われた。

「水曜からは３５mmだぞ」

先週と同じ女子の体操服に着替えさせられて。またランクルで移動。街の中心部を挟んで反対側にある市営の運動公園。全国レベルの大会なんかは開催されないささやかな陸上競技場で、でも広い敷地の外側部分が一般に開放されている。更衣室とかコインロッカーもある。

でも僕は、後部座席を倒したランクルの荷物室で準備をさせられた。体操服だから、そのまま走らされるんだろうなんて考えてたのは大間違い。

まずブルマを脱がされて。太ももに幅の広いゴムバンドを巻かれた。両端が布で、マジックテープで止めるようになってる。ゴムバンドには、(太ももに巻かれたのを大とすれば)中と小のゴムバンドが通されてた。こっちのは、輪ゴムの親玉みたいに円が閉じている。

中のゴムバンドが、両側から男性器全体の付け根を締めつける。こんなので走ったらどうなるんだろう――どころじゃなかった。勃起を強引に後ろへ折り曲げられて、小のゴムバンドがカリクビに巻きつけられた。ゴムバンドは引き伸ばされて、抜けないように普通サイズの輪ゴムで縛られた。

そして、ブルマを元通りにはかされた。チンチンはゴムで下向きに固定されて、それが勃起してるから、股間がM字形のシルエットになって、凄く目立つ。しかも、太ももに巻かれたゴムバンドは露出している。変なことをしている（されているんだけど）のが一目瞭然。

そんな格好で車の外へ追い出された。

先生も、先週と同じジャージ姿。今度は本物の竹刀を握ってる。

「外周に沿って走れ」

公園と外の道路との仕切りは植え込みになってる。それに沿って走れば、外からは上半身しか見えない。ランニングする人たちは競技場を取り巻いている広い遊歩道を使うから、５０m以上離れている。ので、ブルマとショートパンツの見分けはつかないと思う。

見られているようで、実は見えていない。スリルだね。

ただ、問題は――走り出して、１０歩と行かないうちに足が止まった。左右の足を前後に動かすと、身体の中心線上にある『軸』が左右にこねくられる。２台のルームランナーのあいだに置かれた逆さ十字架と同じ原理。痛いんじゃなくて、即射精しそうになってしまう。

「走れ。足を止めるな」

バッシイン！

竹刀でお尻をたたかれた。たぶん手加減してくれてない。

痛いからではなくて、たたかれるところを見られるのが恥ずかしいから、そろそろと走り始めた。チンチンをこねくらないよう、歩幅を小さく――してたら、また思い切りたたかれた。歩幅を大きくして、ピッチは下げて刺激をしのぐ。

「もっと速く」

バッシイン！

ええい。もう知らないから。持久走のピッチで何十歩か走って。

「あ……」

出ちゃった。とたんにマゾ気分が失せちゃって。

（なに馬鹿なことをしてるんだろ）

膝をついて、へたり込んじゃった。でも、たたかれなかった。そうだよね、男同士だもの。射精直後の虚しさを分かってくれるよね。というのは、僕の勝手な思い込み。先生がたたかなかったのは、別の理由があった。

「何をしてらっしゃるのですか？」

いきなり声をかけられて、びくっとしたのは僕だけ。先生は人が近づいたのを知ってたみたい。

「ご覧の通り、ランニングですよ。この子は２年になってから入部したのですが、基本もできていないし筋肉もついていない。特訓といったところです」

「変わったランニングウェアですね」

声をかけてきたのは、５０代後半くらいの人。薄いジャンパーみたいな服装で、『管理員』の腕章をつけている。ヘチマを寸詰まりにしたような顔。

「ランナー養成ギプスといったところですね。筋肉の動きを見るためにショートパンツをはかせています」

イケシャアシャアって、こういうのをいうんだろうな。

管理人さんは、じっと僕の下半身を見詰めている。やばいよ。しみどころか、太ももまでチンポ汁が伝っている。

管理人さんが先生に目を戻して。

「もっと詳しくお話をうかがいたいですな。雨もぱらついてきたことですし、管理小屋へいらっしゃいませんか」

先生が鋭い目つきで管理人さんを見た。管理人さんは先生を見詰め返して、唇の片端をわざとらしく釣り上げる。先生も、同じような表情になって。

「そうですな。こいつも一緒でかまいませんか」

というわけで。公園の端っこにあるプレハブ小屋へ案内された。

「ランナー養成ギプスとやらを、直（ちょく）で見せていただけますかな」

先生のへ理屈の出番だと思っていたら。

「おい。ブルマを脱いで、粗チンギプスをお見せしろ」

とんでもない命令。ためらっていたら、竹刀で股間を（軽く）突かれた。

「俺の命令には絶対服従のはずだぞ」

「……」

諦めて、ブルマをずり下げた。

「ほほう。これはまた……初めて見る趣向ですな」

男性器を虐める仕掛はいろいろ知っているが、これは初めて見た――そんなふうに聞こえた。

「ときに。ここに相撲小屋があるのはご存知ですか？」

管理人さんが、まるきり無関係な（に思える）ことを言いだした。

「８時から１８時まで、半日単位の貸切ですが。管理簿に記載されない時間外の使用もたまにありましてね」

管理人さんが引き出しから写真を取り出して、先生に見せた。僕からは見えない。

「あなたも興味をお持ちだろうと思いましてね」

先生が僕を振り返った。

「おまえは外に出ていろ」

話がさっぱり見えないけど、絶対服従。ドアを開けようとしたら、管理人さんに止められた。
「こういうのは、どうですか？」
写真の１枚を先生に見せて、なにかゴニョゴニョ言う。
「なるほど。貴兄とはなかなか気が合いそうですね」
気が合った結果。僕は体操服とブルマを脱がされてから、裏口から外へ連れ出された。そこは植込みの手前に大きな看板がいくつも並んでいて、外からも公園の中からも死角になっている。
「これは筋トレ用ですが、大きさによってはいろいろと使い道があるのですよ」
管理人さんが持ち出してきたのは、頭がソフトボールよりも大きな鉄アレイ。僕のカリクビに荷造り用の細いヒモを巻きつけて、それにつるした。
「くううう……」
比喩表現ではなくて、ほんとうに目から火花が飛び散った。先生がすぐに鉄アレイを支えてくれなかったら、たぶん泣き叫んでいた。
両手を前で縛られて、鉄アレイの紐につながれた。
はああ……。手を上げると鉄アレイが釣り上がって、カリクビを縛っている細いヒモはたるむ。でも、管理人さん（と、先生）は、そんなにやさしくなかった。別のすこし太いヒモが玉袋の付け根を絞って、それも手首に結びつけられた。
つまり。手を上げすぎると玉袋が引き絞られて、重たい痛みが生じる。
「先生は、この人と話がある。それまで、ここで待っていろ」
雨が本降りになってきたというのに、先生と管理人さんは僕を置き去りにして小屋へ戻った。
Ｈでマゾなことをさせられてるって思いで、最初は半勃起くらいしてたんだけど。いくら４月下旬でも、夕暮れだし雨も降っている。だんだん身体が冷えてきて、それ以前に腕がつらくなってくる。

腕を伸ばしていると、鉄アレイの重みで筋肉がぷるぷる震えてくる。先生が見ていたらしかられるかもしれないけど――肘を曲げて手首を胸に引きつけた。それでも、油断してると手首が下がって、細いヒモが鉄アレイにひっぱられてカリクビに食い込んで、立っていられないくらいに痛い。

あ、そうか。立ってなければいいんだ。座ってしまえば鉄アレイが地面に着くから、腕を下ろしても大丈夫……なんだけど。

座るのはズルをするみたいだし、きっと先生にしかられる。肘を曲げてるよりも、ずっとひどい罰を受けるんじゃないかな。

だから。全身ずぶぬれになって、がたがた全身を震わせて、腕をぷるぷる震わせながら、元の位置に立ち続けた。

それが３０分続いたのか１時間以上なのか。やっと先生が小屋から出てきてくれたとき、僕は半分失神したみたいになって、地面にへたり込んだ。

縄をほどかれて、管理小屋に戻されて。貸してもらったバスタオルで全身を拭いた。

「馬鹿なやつだな。軒下にでもうずくまっていればいいものを」

あ、そうか。雨だって避けれたんだ。

「でも、あの場所で待つように命令したじゃないですか」

僕は、さっき考えたことを説明した。

そしたら、先生は満足そうに（それとも、意地悪そうに？）ほほえんだ。

「そういうふうに自分を被虐に追い込むのは、マゾの心理だ。先週のビデオ鑑賞でだいたいは分かっていたが、おまえは筋金入りのマゾだよ」

もっとも、今はここに筋金がはいっていないがな――なんて言いながら、縮こまっているチンチンをわしづかみにして、可愛がってくれた（のかな？）。

だけど、それ以上のことは~~してくれ~~されなかった。

先生の車で家まで送ってもらうとき（学ランは積んであった）、僕はおそるおそる質問した。

「ビデオ鑑賞で分かったって、どういうことですか。キミエさんが調教されているときも、僕、ずっと……興奮してましたよね。あれって、僕にもサドっ気あるからじゃないんでしょうか」
「おまえは、虐められているキミエに感情移入していたんだよ」
　キミエさんみたいに虐められたいっていうのが、画面ごとの反応で分かるんだそうだ。
　そうかな？　強い人（イコール年上の男性）に虐められたいって願望はあるけど、女性になりたいなんて思ったことはない。あ、でも……ホットパンツとかブルマをはいて勃起させちゃったから、潜在意識としては、あるのかな。僕自身にもわからないことまで見抜くなんて、先生は凄いのか恐ろしいのか、そういう人だ。

４．Ｖ字ふんどし

　なんか中途半端なままで、その日の特訓は終わった。けど、続きがあった。
「予定を変える。明日が本番だ。家の都合はかまわんな」
　この週末は、パパが家にいるけど。ふだんは後妻さんと下の子にばかりかまけてるから、たまには遊園地にでも連れて行ってやろうなんて、考えない人なんだよね。会社の人とのおつきあいで、しっかりゴルフの予定を入れている。
「友達と遊んでくる。晩御飯も友達とファミレスへ行くから。お小遣いをくれるとうれしいな」
　すんなり千円札をくれるのは、すこしは後ろめたく思ってるからかな。
　そして午後２時に、バスを乗り継いで運動公園へ。今日は、ごくふつうの服装。カッターシャツに春物のセーター。もちろん長ズボン。
　管理人室からすこし離れた、ほんとに片隅にある相撲小屋。中に入って、僕は固まってしまった。昨日のことがあったから、先生と管理人さんのふたりからＨでマゾなことをさ

れるんだろうと、それくらいは~~期待~~覚悟していたんだけど。他にも２人いた。

ひとりは、先生よりひとまわりくらい年上で、身体もひとまわりくらい大きい。

もうひとりは、僕より３コか４コ年上かな。坊主頭で、僕に負けないくらいスリム。微妙に眼鼻のバランスが悪くてちょっぴり出っ歯気味。ひとめ見た瞬間、僕と同じ側の人だと直感したので、つい顔の美醜を気にしてしまった。うん、この人が好青年だとしたら、僕は間違いなく美少年だ。

あ、そうそう。先生が言ってたビショウネンだけど。いろいろ考えて漢字辞典とか調べて、媚娼年て書くんじゃないかと見当をつけてる。そういうことをしてる人もいるって、なんとなく知ってる。マゾの女性をビッチとか娼婦っておとしめるのと同じような褒め言葉だと思う。文法は合ってるけど言葉の使い方が間違ってるかな。なんて、ふざけてるのは――強がりってやつ。管理人さんを含めて、知らない人が４人も。びびるよ。

好青年のひとりを除くと、格闘技をたしなんでいると言われても信じてしまいそうな肉体美。なぜわかるかというと――３人とも、相撲のフンドシ姿だから。マワシっていうのが正しいのかな。幅が広くて分厚い生地のやつ。

好青年さんは六尺フンドシ――に見えたけど、後ろがジョックストラップみたいなＶ字形に割れてる。こうなると、服を着ている僕のほうが浮いている。ので。

「さっさと素っ裸になれ」

と言われて、むしろホッとしたくらい。

小屋の隅へ行こうとしたら、しかられた。

「こそこそするな。俺たちに正面を向いて、堂々と脱げ」

はあい（恥ずかしい）。

こそこそせずに脱いで、言われる前に整列休めの姿勢をとった。

「ほう。１週間とおっしゃってましたが、なかなかにシツケが行き届いてますな」

ひとまわり大きいほうの人が褒めてくれた（んだろう）。

「じきにボロを出しますよ」

身内をけなすのは、日本の美風だよね。

好青年さんに手伝ってもらって、僕もフンドシを締めた。股間を前から後ろへ通したサラシを、お尻の下側の湾曲に沿って前へ引き上げて腰に巻く。肩にかけていた布も股間を包むんだけど、こっちは玉の真下で最初の布と結び合わせてから、反対側のお尻に沿って腰を巻く。好青年さんと同じスタイル。

先生は六尺フンドシの余った布を腰に巻き込んでいたけど、僕は身体が小さいからずっと長く余って、正面で結び合わされた。

股間がぴしっと引き締まって。フンドシを締めてかかるって言葉を実感した。でも、ケツ割れフンドシはお尻の穴がスウスウする。

「では、改めて紹介しておこう。公園管理人の小島さんと、相撲愛好家の庄原さん。こっちは、庄原さんの弟子のヨシヒロクンだ」

小島さんと庄原さんは横柄に、それでもうなずいてくれたけど、ヨシヒロクン（じゃ失礼だよね。これからはヨシヒロお兄さんと呼ぼう）だけは、じっと僕を見つめてる。

先生が僕に目を向ける。

「これは、僕のリッシンベン性徒の薫です。天然のマゾですが、まだシツケを始めて２週間足らずの未熟者。たっぷり鍛えてやってください」

「よろしくお願いします」

という挨拶でよかったのかな。とにかく、ぺこんと頭を下げといた。

「薫クンは、相撲を習ったことなんかないよな」

庄原さんの質問じゃなくて断定。

「まずは、四股をおぼえなさい。ヨシヒロ、手本を見せてやれ」

「はいッ」

ヨシヒロお兄さんが（やけくそっぽく）元気よく返事をして、壁に立てかけてあったバットを持ってきた。子供用のバットかな。細くて短いけど、プラスチック玩具じゃない。お兄さんはバットを逆さに持って、グリップを口にくわえた。そして、れろれろちゅぱち

ゅぱとなめる。なにするつもりなんだろう――というのは、すぐにわかった。

お兄さんはバットを地面に逆さに立てると、後ろ向きになってまたいだ。そして……うわ、その上に腰を落としていく。グリップは先っぽが細く削られてる。ので、ずぶずぶとお尻の穴に入ってく。そうか。だから、フンドシの後ろがＶ字形になってるんだ。足を伸ばすと、バットが宙に浮いた。

お兄さんが僕たちに向き直って、大きく足を開いた。そして、腰を落としていく。バットが地面に着いて、グリップの細い部分がすっかりお尻に飲み込まれてしまった。

「く……」

小さくうめいて、もっと腰を落としていく。そして、四股を踏み始めた。

片足を高く上げると、バットが宙に浮いて斜めになる。

「んぐっ……」

ぺちんと足を踏み下ろして、ぐうっと腰を沈める。バットの太い部分までが、お尻の穴に突き刺さる。腰を浮かすと、一瞬バットが宙に浮いて、にゅるんと下がってくる。反対側の足を上げて、またぺちんと四股を踏む。

「薫クンもやりなさい」

じょ、冗談。グリップエンドは４０mmを超えてるんじゃないかな。とても無理。

「いやあ、そいつは勘弁してやってください」

先生の声がこんなにやさしく聞こえたのは初めてだった。

「こいつは、まだバージンなのです。とても無理ですよ」

「ほう……？」

「３０mmのアナルプラグが入るようになったばかりです。基本を仕込むのは今後ということにして、とりあえずは『転がり』を教えてやってください」

「なるほど。『転がり』ができなければ、土俵の上で可愛がってやれませんな」

この会話の意味も、よく分からない。でも、黙って聞いていた。すぐに身体で思い知ることになると、すでに学習しているから。

土俵下の地面で、僕は庄原さんと管理人の小島さんとの二人がかりで『転がり』を教わった。文字通りに、転がり方の練習だった。先生は隅っこであぐらをかいて見学かな見物かな。

柔道の受け身だと、投げられたときに手で畳をたたいて衝撃をやわらげたりするけど、相撲では身体を丸めて転がる。だから『転がり』。肩から落ちて半身になって転がるとか、手で突っ張るなとか教わって。最初は自分でゴロン、ゴロン。全身土まみれ。それから、腕と肩をつかまれて軽く（と、庄原さんは言ったけど、僕の実感としては軽くなかった）投げられて。１５分ほどで練習は終わり。

そのあいだ、ヨシヒロお兄さんはずっと四股を踏んでいた。庄原さんの言い方だと『アナル四股』。

その後は、『すり足』とか『そんきょ』とかの基本はすっ飛ばして、『ぶつかり稽古』。小島さんは「可愛がってやる」と表現してたけど。ほんっとうに、サドがマゾを可愛がるやり方だった。

土俵の上で、きちんと仕切ってから。仁王立ちの小島さんに突っかかる。横に体をかわされて足をかけられて、つんのめったところを、背中を押さえつけられて地面にたたきつけられた。『転がり』なんてできなかった。べちゃっとカエルみたいにつぶれちゃった。顔は打たなかったし、これだけは教わっていたとおりに手はつかなかった。ので、胸からお腹が、じいんと痛い。

「そんなへっぴり腰じゃ駄目だ。頭から全力で突っこんでこい」

「はいッ」とやけくそで返事したのは、ヨシヒロお兄さんを見習ったから。心の中では、ふてくされていた。格上の人が変化するなんて相撲道に反してる。というのは、テレビの大相撲中継の受け売りだけど。されてみると、ほんとうに悔しい。

仕切り直して。これで体をかわされたら土俵から転げ落ちるってくらい、ガムシャラに突っ込んでった。ら、小島さんも身体を沈めて胸で受け止めてくれたんだけど。脳震とうを起こしかけた。ところを、フンドシをつかまれて。ぐるんと天地がひっくり返って、土

俵に転がされた。さっきみたいにたたきつけられたんじゃないから、ちゃんと『転がり』もできて、すぐに立ち上がれた。
「どんどんかかってこい」
　僕は最初の仕切り線に戻って。また頭から突っ込んでいって。ぶつかった後、フンドシをつかまれて引き寄せられた。
「わしを押し出してみろ」
　ぐっと足を踏ん張ったら――ずるっと滑った。
「腰を落として、じんわりぐいぐい押してみろ」
　言われた通りにしてみた（つもり）けど、まるきり小島さんを押し込めない。
「それで精一杯か。頑張れ」
　小島さんは片手をフンドシからはなして、ぱんぱんと僕のお尻をたたいた。
　痛いというより、馬鹿にされてるようで悔しい。
（ぬうううううっ……）
　無言の気合を込めて、ふくらはぎの筋肉がぷるぷる震えるくらいに突っ張る。びくとも動かない。
　小島さんの手がさらに伸びて、フンドシのV字形の頂点あたりをつかんだ。そのまま、逆さに持ち上げられた。きゅうっと股間が圧迫されて、ちょっと痛いけど気持ちいいかな。なんて、H気分になりかけたら。裏返しのブレーンバスターみたいな形で、土俵にたたきつけられた。相撲だから、小島さんは転がっていない。
　たぶん投げ落とす勢いを手加減してくれたんだろう。肩から落ちて、背中を丸めてごろんと転がって。そのままうずくまってたら、脇腹を蹴られた。
「さっさと立て」
　立ったけど。H気分は消え失せてた。でも、マゾ気分は残ってる。これまではH気分とマゾ気分は表裏一体（たまには、こういう難しい表現も使うよ）だったけど、チンチンは縮かんでるのに、胸がきゅうんとねじられてる感じ。

仕切り直して、また突っ込んでった。今度はぶつかる直前で肩をどすんと突かれた。足が止まって上体が起き上がったところに張り手が飛んできた。

ぱんぱんぱんぱん……斜め前方からの連続ビンタ。のたびに顔が左右に振られて、また脳震とう寸前。

「おらよっ」

ぱあんと胸をストレートに突かれて、ふわっと足が宙に浮いて、そのまま土俵下まで転げ落ちた。たたきつけられるのと違ってじゅうぶんに余裕をもって『転がり』ができた。ので、あんまり痛くない。のは、マゾのスイッチが入りっぱなしだからかもしれない。

僕はすぐに立ち上がって、土俵に戻った。

小島さんじゃなくて、先生が立っていた。

「俺も相撲は初めてだ。手加減などできんから、覚悟しておけよ」

体育では格闘技なんか教えないから、当然かな。でも、力の強い初心者と弱っちい初心者との対戦なんて。小島さんにあしらわれるより、ずっと怖い。

それでもとにかく。向こう側の仕切り線で仁王立ちの先生に突っかかっていった。

筋肉の壁にぶち当たった。跳ね返されかけて踏みとどまって、マワシをつかんだ。先生も僕のフンドシを両手でつかんで。『がっぷり四つ』の体勢に――ならなかった。エインていうんだっけ。袋の付け根の裏側と、お尻の穴のあいだ。そこにフンドシの結びコブがぐいっと食い込んできて。宙に持ち上げられてしまった。このまま土俵の外へ下ろされれば（たぶん投げ落とされる？）負け。なのだけれど。

「痛い……やめて」

上下に揺すられて、悲鳴をあげてしまった。先生が相手だと、甘えてしまう。そして、手痛いしっぺ返しを食らう。

「絶対服従だぞ。やめてとかイヤとかは禁句だ」

ももの間に膝をこじ入れられて、股間をそこに乗せられて、さらに上下に揺すぶられた。玉が突き上げられこねくられて、お腹の奥まで鈍い痛みが突き抜ける。

「あ……ごめんなさい」
　ずずっとずり下がって。膝頭をもろに玉の正面にぶち当てられた。
「うあっ……」
　尻餅をつく形で土俵に投げ落とされた。股間の痛みで、『転がり』どころじゃない。ショックが背骨を突き抜けた。はいつくばる姿勢で立ち上がって、ケンケンして痛みを散らそうとした。でも、フンドシで押さえられているから、釣り上がった玉が下がらない（のかな？）。
「土俵の上で踊るな。さっさとかかってこい」
　うう。先生はサディストだ。そんなこと、分かってるけど。
　股間のうずきを抱えたまま仕切って。よたよたと突っかけた。今度は股間をわしづかみにされて、ブレーンバスター（小島さんのときとは体勢が違うけど、プロレスの技なんて、あまり知らない）みたいに持ち上げられて、うつぶせにたたきつけられた。
「戸坂先生。いちおうは相撲なんですから、膝を突いてはいかんですよ」
　小島さんが注意してくれた。んじゃなかった。
「立ったまま投げ下ろしてください」
「いやあ。うまく勢いを殺す自信がなかったもので。面目ない」
　やっぱり、先生には甘えてもいいみたい。かな？
　そこで、ひと休み。アナル四股をおしまいにしてもらったヨシヒロお兄さんが土俵に上がった。相手はごつい体格の庄原さん。模範試合ってとこかな。
「お願いします」
　仁王立ちの庄原さんに頭を下げて挨拶してから、ヨシヒロお兄さんがぐっと腰を落とす。しゃがんで両足を１５０度くらいまで開いて『そんきょ』の姿勢。から、上体を倒して両手をこぶしにして土俵に突いて。すごく本格っぽい。
　とんっと片手で土俵をたたいて、斜めに低く伸び上がる感じで庄原さんの胸板に突進。
　ばんっと、肉と肉とがぶつかり合う音が聞こえた。がっぷり四つに組み合ったと思った

ら、ずどどどどって感じでお兄さんが押されて。土俵ぎわで身体が宙に浮いて、そのまま土俵下に投げ飛ばされた。

お兄さんはきれいに転がって、一瞬で立ち上がった。本物の力士よりきびきびしてるのは、身体が小さい（３人のオトナと比べての話だよ。僕より頭半分くらいは背が高いし、体重も１０Ｋｇは重いと思う）せいかな。

土俵に戻って『そんきょ』を省略して仕切って、また全力で突っ込む。今度は組み合う前にべちゃっと土俵にうつぶせにたたきつけられた。それでも『転がり』できれいに起き上がる。そして、また突っ込んで。張り手を立て続けに胸に受けて押し返されて、そのまま土俵下に転落。

アナル四股で脂汗まみれだったから、３回も投げられると土というより泥が全身にこびりついたみたいになった。

それなのに、受け止めるほうの庄原さんの身体は、ほとんど汚れていない。ていうか、汗ひとつかいてない。

それからも延々とヨシヒロお兄さんは投げ続けられて。合間に張り手とかも食らって。ちょうど十回目で、とうとう立てなくなった。土俵にあお向けの大の字。

「どうした。もうギブアップか」

庄原さんが、ヨシヒロお兄さんの股間を踏んづけた。ぐりぐりと踏みにじる。

「もう勘弁してください」

庄原さんの足から逃げようとはせず、小さな声で訴える。

「気合が足りん。とっておきの気合を注入してやる。フンドシを取れ」

「はい」

お兄さんが起き上がって、土俵を下りて。フンドシをほどいた。

（ええっ……？！）

お兄さんの股間で、僕のより大きなペニス（チンチンなんて可愛い名称は似合わない）が勃起してるのは、お兄さんもマゾなんだから当然かもしれないけど。僕と同じで、つる

つるなのには（一瞬だけ）驚いた。生えていないんじゃないと思う。きっと、そっているんだ。

庄原さんがお兄さんを外へ連れ出した。

「俺にアナルを奉げるときは、おまえにも同じことをしてやるから、よく見学しておけ」

僕も先生に連れ出された。

相撲小屋の裏はプラスチックの波板で囲われたシャワールームになってる。そこで、お兄さんが四つんばいになった。庄原さんは水道につながれたホースを引っ張ってきて、お兄さんのお尻に突き刺した（ように見えた）。

お尻から少量の水が飛び散る。ほとんどは、お腹に注入されてる。うわ。ぽこっとお腹がふくらんできた。

ホースが引き抜かれた。と同時に、アナルプラグが突っ込まれた。瞬間的だったから断言できないけど、傘の部分の直径は５０mmくらいもあるんじゃないかな。

「今日はゲストも見ておられる。１０分は我慢しろ」

お兄さんが四つんばいのまま、恨めしそうに庄原さんを振り返った。

「はい……」

しょげた声で返事したのだけれど。

「でも、自分で抜いてしまいそうです。縛ってください」

正座して、両手を後ろにまわした。

あ、これ。すごく分かる。僕は洗濯バサミとかでも遊ぶ。乳首は耐えられるけど、カリクビは数秒で降参してしまう。もしも両手を縛られてて自分で取れなくされてたら……そう思うだけで、胸がきゅうんとなっちゃう。実際にされたら、きっと泣いちゃう。許してくださいって懇願するだろう。だから、サルグツワもしてほしい。なんて妄想は、このさい置いといて。

「そうそう甘やかすわけにはいかん」

庄原さんが相撲小屋から手錠を持ってきた。僕がはめられたようなふわふわなモール付

きのじゃなくて、キミエさんがされてたような金属のごついやつ。お兄さんの手首を肩の高さまでねじ上げて、片手をはめる。手錠の鎖を喉の前にまわして、反対側の手にもはめた。

「く……」

お兄さんが、苦しそうにあえぐ。なんとか息はできてるみたい。

これ、凄い厳しい責めだ。肩甲骨がＶ字形に浮き上がってる。手を下げようとすると、自分で自分の首を絞めてしまう。

お兄さんは正座したまま、身体をのけぞらせて、そのまま固まった。

庄原さんがホースでお兄さんの身体に水をかけて、泥を洗い流し始めた。お兄さんも腰を浮かしたりして、協力している。

「たいしたものですな」

先生がお兄さんでなく庄原さんに話しかけた。

「５リットルは注入したと見ましたが。泣き言ひとついわず、健気に耐えている」

庄原さんがニヤリと笑って、お兄さんのふくらんだお腹を軽く蹴った。

「んぐ……」

お兄さんはのけぞったまま、顔をゆがめた。

「ここは配管が長いので圧力が足りません。せいぜい３リットルくらいですかね。これくらいで泣きを入れたりしたら、それこそ５リットルで２０分ですよ」

庄原さんが事も無げに恐ろしいことを言った。それがどんなに恐ろしいことなのか、実は自分で体験するまで、僕には分からなかったのだけど。

１０分が経過して。お兄さんは外の植え込みのそばへ連れてかれた。このあたりは（管理人さんが意図的に仕組んだんだと思うけど）植込みが密集してて背も高い。

お兄さんは後ろ手にねじ上げられたまま、ウンチング・スタイル。庄原さんが身を屈めてアナルプラグを引っこ抜いた。

お兄さんは括約筋を締めて、まだ我慢を続けている。

「出してもいいぞ」
　庄原さんの許しが出たと同時に。
　ブジャアアアアア……蛇口の壊れた水道みたいに、水がほとばしった。地面に水たまりが広がってくけど、固形物は見当たらない。
「いい心がけだな。おまえも見習え」
　先生が何を言ってるのかは、つぎの言葉で分かった。
「クソが混じっていたら、おまえも５リットルで２０分だぞ」
　これからは、先生に会う前には自分できれいにしておこう。
　水流が止まってからもしばらくは、ずちゅちゅ、びち……滴が垂れ続けた。それから、またシャワールームに戻されて、１リットルくらいかな、水を注入された。今度はすぐに、シャワールームの中で排出。完全に透明な水だった。
「続きは管理人室でしましょう。仮眠用のベッドもありますし」
　ということで。オトナ３人もマワシをはずしてシャワーを浴びた。まだ陽は明るいから、きちんと服を着た。僕はフンドシのままホースの水をかけられて、バスタオルですっぽりポンチョみたいにくるまれた。お兄さんは全裸にタオル。フンドシの有る無しなんて五十歩百歩だね。オトナ３人が一列になって僕たちを隠すようにしてくれたから、誰にも気づかれなかったと思う。
　仮眠用のベッドというのは、簡素な応接セットのソファだった。小さいテーブルを片付けてソファを引き出すと、背もたれが倒れてベッドになる。やっと手錠を外してもらったお兄さんが、その上で四つんばいになった。
「まずは、ゲストからどうぞ」
　先生がズボン（とパンツ）だけ脱いで上半身はシャツのまま、ベッドに上がった。お兄さんの後ろからお尻を両手で割ってのぞき込む。
「きれいに引き締まっていますね」
「拡張ばかりではなく、締まりを良くするトレーニングもさせていますからね」

庄原さんが自慢する。
「なるほど……」
先生が前にまわって、まだうなだれているオチンポ様（そう言えって、シツケられた）をお兄さんの口元に突きつけた。
お兄さんが、あむっとほお張った。もごもごと、舌と唇を動かしてる。ずぢゅううううと、顔をヒョットコみたいにしてオチンポ様をすすりながら顔を引いてくと、ぎんぎんに勃起したオチンポ様が姿を現わした。
「よく仕込まれているな」
先生がお兄さんの坊主頭にオチンポ様をこすりつけたのは、なでたつもりなんだろうか。
また後ろにまわって。今度は四股を踏むみたいな体勢で腰を下げて。ずぶうっと、オチンポ様をお兄さんのお尻に突き立てた。
「あんっ……」
お兄さんが、女の人みたいな甲高い声でうめいた。あんな太い『物』を挿れられて、ちっとも痛くないどころか気持ちいいみたい。
先生が腰を前後に動かし始めた。同時に、お兄さんを押し引きしてる。
「あっ、あっ、あっ……」
押し引きのタイミングで、お兄さんがあえいでいる。
あっけに取られて眺めていると、庄原さんに声をかけられた。
「薫クン。きみは前を使え」
(……？)
意味がわからずにぽかんとしていると、小島さんに手を引っ張られてお兄さんの正面に立たされた。床に立っている僕の腰は、ベッドで四つんばいのお兄さんの顔のすこし下。
お兄さんが手を伸ばして、僕のフンドシをほどいた。Hな光景に刺激されて、すでに勃起してるチンチンが飛び出した。
「もっと近くにおいでよ」

まさかまさかまさかなんて思いながら、ふらふらっと近寄った。

お兄さんが身を乗り出すようにして顔を近づけて。僕のチンチンをくわえた！

「あっ……」

腰を引こうとしたけど、小島さんにぶつかった。

「自分のチンポでテクニックを学びなさい」

ていねいな命令口調って感じ。

ずぢゅうううう……

うわ。空気がチンチンをこすりながら吸い込まれてく。お兄さんの唇も震えて、ビブラート。すごく気持ちいい。

お兄さんの舌が、亀頭をなめまわす。それだけで射精しそうだ。なのに。おしっこの穴を舌先でつつかれたり、カリクビを歯の先っぽで逆なでされたり……

（やばい！）

小島さんを突きのけてでも逃げようとしたら、お兄さんに腰をつかまれて、逆に引き寄せられた。もう、止まらない。そのまま射精してしまった。

ぶしゅ、どくどくどく……ふだんの何倍もの量が噴出した。

「はあああああ……」

すっごい幸せ。フェラチオって、こんなに気持ち良かったんだ。あ、でも。僕はまだ全然へたくそだから、先生はそんなに気持ち良くないかも。頑張らなくっちゃ――なんて、思ってしまう。

ずじゅうううう……お兄さんは、まだ僕のチンチンをすすってる。尿道に残ってる汁を吸い出してくれてる。けど、これはあまり気持ち良くない。というか。射精した後の虚しさが押し寄せてきてるから、もうHなことはしたくない。

「あの……もう、いいです」

お兄さんもマゾで僕と同じ立場だから、拒否してもいいよね。

お兄さんは、僕の腰を抱いていた手をあっさりと緩めてくれた。

僕が身を引くと、入れ替わりに小島さんがお兄さんの正面に立った。
「分かってるだろうが、わしはそう簡単に逝かんぞ」
言葉のとおり、ペニスは半勃起にも達してない。そういえば、先生もずっとピストン運動を続けている。
「んぶう……んんん……んんんっ」
お兄さんは口がふさがってるから、鼻声しか出せない。それが、すごく切なそうに聞こえる。アナルセックスが気持ちいいんだ。もちろんペニスはお腹にくっつくほど勃起してるけど、マゾだから気持ちいいことの証拠にはならない。僕だって――自分で洗濯バサミを使うときも、先生に縛られたときも、気持ち良くなんかない（当然だけど、むしろ痛い）のに垂直勃起してたもの。
「あああっ……駄目。出、出る……！」
お兄さんがペニスを吐き出して、裏返った声で叫んだ。
「ああっ……！」
うわ。ペニスをまったく刺激されていないのに射精しちゃった。顔をうつむけて大きく口を開けて――お腹をかすめて噴出した汁を自分の口で受けた。でも大半は飛び散って、顔もベッドも白濁でぐちゃぐちゃ。
先生が動きを止めた。勃起したままのオチンポ様を抜いて、お兄さんのお尻を平手でバシンとたたいた。
「急に締まりが悪くなりました。ひとりで満足したようですね」
庄原さんが頭をかいた。
「いや、申し訳ない。わしのサイズに慣らしてしまいましたか」
庄原さんも下を脱いだ。まだでろんと垂れているけど、それでも勃起した先生と見劣りがしないほど。
「デカ魔羅も善し悪しですわ」
庄原さんは自分でしごいて……ふわあ、さっきのアナルプラグよりも太いかな。

「わしので、とどめを刺してやろう。自分で挿れろ」

お兄さんを押しのけて、ベッドであお向けになった。小島さんも、まだ射精してないのにお兄さんからはなれた。

「もう……赦してください」

そう言いながら、お兄さんは庄原さんにおおいかぶさって。ぺろぺろあむあむ、ずちゅううう。勃起させると、庄原さんに後ろ向きにまたがった。左手で重厚長大ペニスの根元をつかんで、その上に腰を落としていく。いやいやって感じ。それでも命令に従うのは、逆らえば５リットルで２０分とかされるからだろう。

「薫はフェラの特訓だ」

ぼけっと突っ立って眺めてると、肩をつかんでひざまずかされた。

「まずは小島さんに教えてもらえ」

僕もお兄さんと同じで「もう赦してください」なんだけど。命令に逆らったら、どんな罰を受けるんだろう。試してみたいとは思わない（ほんとだよ。今は……）ので、小島さんに向き直った。

「よろしくお願いします」

教わるんだから、ちゃんと挨拶しないとね。

「お願いされてあげよう」

小島さんはふざけた返事だけど、ペニスはふざけてなかった。先生のと同じサイズくらいのが、口元に突きつけられた。

あむっとくわえた。舌ざわりが、先生よりすこし軟らかい。味も違うかな。先生のは獣臭いっていうか、ねっとりしてる。小島さんは、お日様でふやけた海草に消毒用の塩素をふりかけたみたいだ。どっちも（今の気分だと）異臭。

お兄さんにフェラチオをしてもらったときのことを思い出しながら、ペニスをすすろうとした。けど、うまくできない。まったく空気を吸い込めない。唇を緩めたら、ブハッと一気に吸い込んでしまう。全然ビブラートがかからない。

それじゃ……舌先で尿道口をつつくのも難しい。だって、舌のほうが圧倒的に大きい。

カリクビを歯の裏側でこすったら、股間を蹴りあげられた。もん絶しなかったのは、手加減してくれたから。たぶん、僕を気づかってくれたんじゃなくて。僕が歯を食い縛ったりしたら、小島さんが大変なことになるからだろう。

「かむんじゃない」

「ごめんなさい」

ペニスを吐き出して謝った。

「ヨシヒロお兄さんにしてもらったようにやろうと思って……うまくできないんです」

小島さんはしばらく僕を見下ろしてた。

「では、おまえにもできるやり方を教えてやる」

僕にペニスをくわえさせて。両手で髪の毛をつかんだ。そして、激しく前後に揺すぶり始めた。

これ……先生にもされたやり方だ。もっと激しい。脳震とうを起こしそうどころか、目の前が赤くなって星が飛び散る。喉の奥もがんがん突かれる。吐き気がしてきたけど、我慢する。しないと……３リットルで１０分でも、いやだよ。

「これは、厳密にはフェラチオではない。イラマチオという。テクニックもなにもいらん。楽だろ？」

ちっとも楽じゃない。苦しい。けど……じっと耐えてればいいんだから、そういう意味では楽かな。なんて考えは、まったく間違ってた。

あ、亀頭が硬くなってきた。もうすぐ射精だ。赦してもらえる。そう思った直後に、ぴたっと動きが止まった。

「まだだ。くわえていろ」

３０秒くらいして、また激しく揺すぶられ始めた。そうか。小島さんが主導権を握ってるから、出そうになったらひと休みして。延々と責められ続ける。いつかは腕が疲れるだろうけど、それまでに僕が気絶するかも。という考えさえ、まだまだ甘かった。

頭を揺すぶる手の動きが止まって。今度は腰を顔面にたたきつけ始めた。それ自体は別に痛くないけど、頭が揺すぶられるのはあまり違わない。

やめてもらうには……射精してもらうしかない。僕は意識もうろうとなりながら、懸命に舌をペニスに絡めた。唇をすぼめて、できるだけカリクビをしごくように心がけた。

鼻水が（それとも涙？）が出てきたけど、拭いているひまはない。よだれも口にあふれて、ピストン運動のたびに唇からこぼれる。

１０分経過したのか３０分か、分からないけど。

「出すぞ！」

いきなり声をかけられて、あわてて息を止めた。喉の奥に衝撃。

「けふっ……」

いったん口の中に吐き戻してから飲み込んだ。味なんか分からない。まだ部屋全体が、ぐわらんぐわらんと揺れている。うずくまったら、目まいが激しくなった。ので、床に寝転がった。

お行儀が悪いってしかられないかなと思ったけど、見逃してもらえた。

「あっ、あっ、あっ……」

気がつくと、さっきからずっと、切迫したあえぎ声が続いてる。声のする方に頭を傾けると――お兄さんが庄原さんをまたいで座って、膝の屈伸を繰り返している。そのたびに重厚長大なペニスがお兄さんの中に出入りしている。

「どうした。これしきでは、まだまだ逝かんぞ」

庄原さんがお兄さんのペニスをつかんでる。垂直に勃起している。お兄さんの腰が上下に動くと、手の中でペニスがしごかれる。

「もっと締めつけろ。腰をくねらせろ。後輩が見ているんだぞ。模範演技だ」

だけど僕は、模範演技を見学する気分じゃない。目を閉じるとかえって目まいがひどくなるので、ぼんやりと天井を見上げて、気分が落ち着くのを待った。

庄原さんが射精すると同時にお兄さんも２回目に達した。

なんとなく白けた空気が漂って。
「皆さん、まったりとしておられますね」
先生が、ちっともまったりしていない口調で言った。
「おお。戸坂先生は、まだラチを明けておられませんでしたな。ヨシヒロをお使いになりますか。それとも、薫クンにフェラチオ指導を？」
「いや……」
いつのまにか、先生はきっちり服装を整えている。
「どうも、お二方と僕とでは方向性が違うように思います。今日のところは、これで失礼させていただきます」
不機嫌ぽい。
「いや、相撲で可愛がるというのは、なかなかに興があります。催しなどありましたら、お声をかけてください。僕のほうからも、イベントの案内はさせてもらいます」
オトナの社交辞令ってやつかな。本音では、趣味が合わないからアバヨ――みたいに聞こえる。
僕も先生にうながされて、大急ぎで身支度を整えた。

帰りは、先生のランクルで送ってもらった。
「どうした。尻切れトンボで不満か？」
不満は、ない。ただ戸惑ってる。強い男性が年下の弱い者をHに虐めて――先生がしていることと、同じじゃないのかな。方向性って、なんだろう。
分からないけど、どう答えればいいかは分かっている。
「僕は……先生の命令に絶対服従です。不満なんて、ありません」
先生は、ダッシュボードから煙草を取り出して火を点けた。窓を少し開けてくれる。
「今日のは、予定外のイベントだ。新しいつながりができればと期待していたが――そうう まくはいかんな」

一服しただけで、煙草は灰皿の中へ。

「つぎは俺の仲間を呼んで、いよいよおまえの貫通式だ。覚悟をしておけよ」

つぎというのは、４月２９日だそうだ。大型飛び石連休の初日。５月１日まで、ぶっ通しで可愛がってやると宣告された。パパは例によって後妻さんの実家へ２８日の夜から泊まり込むし、僕もそれについて行くというウソの届け出で３０日の土曜日は学校を休まされる。僕を~~虐めて~~可愛がってくれる張本人が担任だから、ばれっこないよね。